耳袋　三

和書門
類 二三四九七 號
一一四 函
二 架
五 冊

内閣文庫
和書
類 二二四九七 號
五 冊
二一一 函
六 架

内閣文庫		
番號	和	22497
冊數	5	(3)
函號	211	117

国立公文書館
National Archives of Japan

耳嚢巻之三目録

一 仁恵深く有し事
一 毒妖虫の事
一 鼬の呪の事
一 一休和尚道歌の事
一 師の家より奇怪を談ずる事
一 人の念業によつて仏像流れ出し事
一 神尾若狭守経済手段の事
一 水野和泉守経済奇談の事
一 丹波国高卒都婆村の事

一 滝夜叉といへる妖獣の事
一 窮借に溺の事
一 たかくさるの奇にて身を立し事
一 奇物を得て富し事
一 下賤の者ハ心得て下に住事
一 邪神を信し薬剤を捨る迷ひの事
一 名に寄て職様なる事
一 高利を貪られ難患ある事
一 其国風いたきある事
一 国阿うしといへることわく事

一 忠僕盗賊を欺きし事
一 孫養子に譲さる事
一 狗子流りの事
一 世間のものも自然と生まれ所に依る事
一 人の気禍ハ人化に不及事
一 佐野惣三郎狸の事
一 天地生理を極めし事
一 天気移るといふ事
一 精心にて家業盛んなる事
一 奇表なし是難極事

一 神明宮を基とし祈る事
一 三峯山にて犬をかる事
一 明神の社壇に生ずる霊の事
一 一旦堂織の仲間へ入し末路の事
一 深切の祈誓に生ずるしるし事
一 御門主明徳の事
一 生まれて悪りをなほその事
一 玉石の事
一 樹木物にまて光曜ある事
一 利をはかりて損をまねきし事
一 寄紙の人に係る訴の事
一 本庄宿島若三右衛門の事
一 吉田善蔵方の事
一 撫物志を失ひし事
一 売物に仏ほるべき事
一 茶臼山異人民の事
一 矢作川にて妖物を拾ひ難義せし事
一 秋葉山魔火の事
一 手業は清にあらされハ事不調る
一 海上にいぐしとりたる祈る事

一 鴻の巣をおろし危き害に逢し事
一 鳥獣か相合を考る事
一 新御の人異人の許に渡りし事
一 使役人乞丸か服の事
一 信心に依て危難を免れし由の事
一 狐付吉か異を語りし事
一 大人の含味に行常の事
一 手分限に宜し手言葉も左有る事
一 阿新門餅の事
一 安芸家踊の事

一 天威自然の事
一 大坂観音四郎の名書取替えの事
一 悪党なれど手段も一工夫なる事
一 金銀二論の事
一 風土気性未一様に難極事
一 人の様子よりて本性へうつさる事
一 言語可慎事
一 戯も事にもて咎ある事
一 時節をもて物を的中なる事
一 芸能堪能の人心を感動さし事

一 老家奇談の事
一 橋氏狩介の事
一 戯母安家来の事
一 盲人吉兆を感通せる事
一 夢地なしたる難中の事
一 未熟の射藝に狐の落し事
一 孝童自然に禍を免れし事
一 雷公ハ人に乗移るといふ噂の事
一 精心にて出世をなせし事
一 年始けて毛ゝ生業を失能きほくいふとなき事
一 怪をまつらし毛抜の事
一 明君倹素を定め給ひさる事
一 手職の上手名元接ふの事
一 吉瑞の事に付而談の事
一 七條諏訪明神の事
一 一向宗信者の事
一 門跡衣鉢の事
一 古来の代にまして新を苦む謡りの事
一 梶左ゑ来る事
一 清中陰中人を殺害なきしこその事

一 武士たる平日のつとめにも情味の事
一 狐猟師を欺し事
一 偽も実と思ひ実も偽と思ハるし事
一 先格をやり猿の情性の事
一 酒宴の興にも程あるへき事
一 極まいのちを捨し事
一 飢渇に臨みて一飯を乞し事
一 先祖伝来封筐の事
一 詮ヶ喜ハ蜻鳥石の事
一 町家のもの共利を求る工風に驚き事

一 古へハ武道家流の事
一 吉兆家流の事

仁慈猶〻ふかき事

東叡山　御門主へ手振禮させし序執事なる僧頂
院の許へ立寄られ酒なと出し暫く物語させしに繁
の席にて語りしは此二三年諸国不熟して米穀の價高
文して今日を凌き兼し萬民難儀しけるか御門主
憐て御かへりし　村〻　寺院より御救御願請なと
仰付られ百姓及ひ御府内の貧民とも御救を給はり
家〻戸〻よりも志あるものハまて人の施しをなしぬ僧
頂院なとよりハ親への事なきハ親多付る事を申付られ
ふも申付て急にしらせかりけるをいかにもなきまて施させ

事ありともなかりしか仏所役へ持参さし小僧召し
ける日々仏前へ備へ或ハ法服衆会なとにも度々上へ上る
を極め馬なとにも与へ候てこれ等集まり例より大川もさ
へ流れやうに致しなかり哉の事也とて生ていた
ぬきハ辰の事にありてハ餘程の寺領ハ致しぬ様子
いたしぬよりて辰の巳月日光へ御門主様の法修して其
干し比様中飢渇のおりへ施ましとて施し与へしに
御非領なとよりハ遠く程に来りしを見しと語りぬ
其小僧ハ親母家出家也所ハ如何さしと尋ねしに
節ハ上方へ学問にまかりしとなり

両頭蛇の事

叔孫敖か両頭の蛇を殺し其余両頭の蛇類の事人の
かたり伝ふるを常に聞きしてなかりしに河野信濃
守は伊予の守りの頃肥前諸島へ下居ハ晴法院法印
にて彼地にありしに其所の両頭の蛇見しを語りにきかして
持ち帰り予も見にて伝りき

鰻の呪の事

今急に彩ハ世様不なとに鰻のかかりて難儀せんよハ
たのむくまて祈りて頼めハ生急くへハ鰻かからさる
こよし由古人の語りぬ

縋の咒ハたゞんゑの袮ちきりて足ゑ妙王のちからしりん

一休和尚善法寺の事

山村信が物語ニ此程一休の書讀して持来の文を

しる面ふき物とてアそび見ぬ

之

書うたの彩むへきことの樗木枝話をきくハ後の世の為

あけりやとの〳〵

めぢあり書ぬへ一休の送りし物なれん面ふき發なき

ハ言にちらしぬ

跡の手より奇怪を読し初る事

あづまの始末へ三念寺ハ室町ニ住ける法ある人の信仏者の

弥陀自統と讀経なしけるとて信心の書写大佛檀

をおもしろがりける殿く其訳を訊しぬきハ大林律の

頃ろハ雅屋の家境なるに大境へ修の菓をくひて子修

ともちらくと毎夕に鳴しをやめて風と仏像の誦経

なし給ふと云置かしめて去りし由皆く笑ひくニ

十日余の事をさましけるとや

人の言葉に依りて仏像流り出る事

宝暦の始めしこ年も末への事なれ加賀の大聖寺中宮

とやらん本町二丁目の古鉄店にて釈迦の古鉄物を調

帰りて郡庄の国に帰り水なとに向て礼拝なしける
を侍坐の者見て是ハ恐ハしき仏なりとあさけり笑ひ
けるを郡庄聞なるきん是ハとなきけるか返し
仕らふへしといひしを法中にもきんうなるくなくまてんと
めけれとえの古鉄店へ持来して此仏を返しけるに中
けれハ一旦南ひくにそ日か翌日にもなほ請れしたかなん
日来あを得くこのへしんてハ自余の俗にても年仏る難義
のよし善けるを法中にて偶を唐しれ抵とも中
あるハ先取も古也偶にても及そ返しける請れ下
と云し古何なるを拡のあふとなれハ法中る口の相

子やよかりきん此仏を洞へ帰りて礼拝葬敬せしに定
このへえの事へ返しけり振葬ふつくるなく家ふうなさく
に返さくしと請りけれハたまくハ是非へとて請れしける
物ハ仏俳にても又ミへし　俗家にて重て安置なしてミふ
の墓所へ納めて如来を請りけるにそち僧をとあ
是の迄ひをなし一大虚を呪まハの形此めくを協
是のく此法と佳めくさつし大の仏像への来請學
集たをなしけるとなん

永尾英持る経淋子法の事

有持る以中ハ石部二三部こゝりし　附法へ納戸取を初め

かゝる事故ハ御納戸向も御先例并品々の振ニハ無之
御納戸ニ而ハ無之御用ニ而も請取候ものニ而も諸事取計手間候を
前毛數多相成候も御番所ハ勿論町人共との事へ下ヶ
並御用ニ而も捜索熟之及候ハゝ右之節御納戸頭
御付御引渡しも相済て右頭の面々へ一統申談候ハ
御納戸金銀并御用之の御用之ものゝ儀ハ悉面ニ
引合改並ニて申候事勿論引合ても年を申渡し候
ハ御番所并御用并其大ニ違ひて候ニ付
調へ候失の品ハ悉くに償ひ候ものといへと見限ニ
至り候ハゝ速く悉面ニ引合改申させ自身改ニ

ニも不及して御定相の分ハ封印を付置して上に
引渡し改候御請取ニ而も無之候也

水野和泉守様御談の事

享保の頃御書蔵へ入有之候和泉守ハ小身より出
人ニて才力も勝れ下々の事も能存へ候人ニ有之
上ニ宝永元禄の頃文華盛ニて殊ニ勝手の世中
ニ有之候ニ付諸事御元の御用并ニも思ひ付きゝ候ハ
り諸人も知候故ゆるく好きも小身の事多しかも其
ニ何も納并ニも町人ハ別けて御蔵へ一之相集ニ
有之しニ或日和泉守御勘定奉行を以て申し候浅草

の法花へハ此趣法花宗へ不残改めて申習ニ申付るへしと
申渡しけるに法華寺よりハ法花寺へ申渡ける
によつて法花寺よりハ勿論法花に移りし者ハ大きに行を
法し俄に花宗の末寺共へ申渡して今迄本寺を法花宗へ
積重き科ふ其の外ハ堀江町伊勢町其外の町々の末
寺ともより本寺を借りうけて讃に其後法花へ積入ける
大勢寺の者に人を付て当番に乞請と申て和
泉寺自身法勤宗まりを同じ寺にて法花宗への戸口を
閉ぢき逃て改めてあるしけく捕く世にして跡方なき
法末をもいふまを捕ゆ法花には法用来るへくは申出及し

に今日不残寺々へハ其訳法に移りける事にて其説ふる
之様にハ役人の為にまは法国本の外ハ自分に封印をい
たすへしとて楼中より下知きし封印紙を出し役
しけるに是に移封をなしける本寺を借りける末寺とも
よりハ其返状を取ひけるに不残様に訳法なして其
役人の者共に其かゝりぬるハ彼是取締て事なく済
けるが和泉寺一派の計策にて法花の法国寺ハ調ひ
きられとも也

丹波国ニ而志(幸)波村の事

ある人語りけるハ丹波国ニ而幸波村といつるに大造

の太宰都濃の事どもハ宝光寺附宗菩提の寺なる由
附宗ハ小条九代執権の主一人にて入道の後都鄙の愁
苦を救ひ理世安民のためにくを見しまはりけるに太宰
都濃村にて老夫婦の許に宿をたまはりにみましく
一夜を明しけるに急ぎ都けりけ有様偽りに答へきまへき
抱ふしとて粟飯を炊き菜室との介茄子を添て出しハ
附宗に依しまゝへハかへ除て味を調味して出しける
有に宝光寺に主ら訳を尋ねへハ初種ハいつも附宗へ捧け
跡ハ附の天子附の執権へ献せらるゝと上にて作用り答
遺恵せらしく宝けれハ宝光寺甚感し謝ひ思ふ偽ハ諸金の

ことの也自然領金へ出頭しけるに附ハ此割判を
持参して頼ましまるかハ不遠来るへしとて割当をたる
されけるに後彼老夫婦領金へ出彼偽を申ね割ちんを
出しけるに杜田城ヰ出仕の折から途中にて右の割判
をさし出しありけるに城主老夫婦の右を我家へまねし
委しく事の由を宝光寺へ申上けるにそ彼老夫婦を呼出され
宝光寺実面にて何そ望みかあるやと尋ねしに老夫
妻の申けるハ何もなけれハ何を願ひ申すへき大村を
高少ナよて国家の村々まハ村々の助成よて年貢を
よく願ひしに諸役免除の定めを願ひけるに是に大方

宇都宮村ハ五役の村方にて六ハ稼くに百石余の土地く
依之右ま如ハ一社の神に宇都宮の蓮照を勤ま
る事を天の大塔宮をまつりしてかくに給ひしや

猯（まみ）といへる妖獣の事

然るに法候寄を法しめらく病氣にて近役さし松田
八郎兵衛といへるハ庄家当町にて久しく行て六ヶ年
の者右庄家へ妖獣出しと思ひ妙法寺しるに八郎兵衛
方にて法しめし吉田宗兵衛ら許へ来り頼し夜に
其儀をつゐしに彼等のも松田方を迎し法なるら古猯
出来なるまでに留しら相違なし或者庄家内をも見りし

中宮へ見付もの又大中宮榛にて其掛るに榛に喰付
なとし居るを見きて頃人つとめくる中村仙兵衛と云
つる者の其庄へ頭込ぬ仙兵衛も早速かけ出てみるに大
より餘程大きく眼ハ日月のことくに毛色嵐のめくるごとく
猛なとらく其ゆに墓の脊を疵くやうにて見しら
追つく人出て追出し居る境なる大穀の内へ入の穴へ
にハあり来を出ひし内に其後ハ稼く出きりしぬ何
なる物なるやてことといへることみなりと或人のいひしら
たるもるやと語りぬ

窮借手段の事

歯磨ハまづ雲を除くお薬なる今江戸ハ放蕩ふ成りて
多くハ衣類及其を売つくし売払ふる物ハ甚よく売
もらひ出しつとして売りつくさ上時に除く新調をなして
甚是家なれと表を飾り世すこ之文ニ今様を好み
なる文易にきひ持ぬきハ多分二季れ清も請にて
勝の上にて足らし式年御付いて大晦日にいくりて
薫物行の勝館を新らし烏目二百調にて一夏衣の節
来りしてお振き台所の振にて勝日勝衣湯持を掘
立読経を読さきこ止月ハ一万なる家にて屏風をとこ立
立し金表打ちかり一万あなる者にて蒔絵もちひれあて

されは茶又ハ白湯を売りしさきて売りけるをさらに来り又き
借金をなくなりにて来るときへハ女房立出で表下なるくの病
気なりをかえなくし祈禱をなし医薬をもし体掛ぐり
語りて大晦日をきのき思え日ハ俄に髪月代なとし
て年礼に出歩行うらとありおうしきに夜もなる物也
不斗の事ひまて身をたし申
武江都の産上方まちなしてまことしてそしらる身持も宜
しからさる泊人しくらうる家数にてハ使も身をたしい
事も朱雑くと師の行へとて来きへ下りけるらは洗面
もきひ切くまつき振なく湯えすに悟く返事し　汁

按摩なとを稼して稼きくらしけるに大坂町人の隠
家彼温泉にきたりて入湯し不快の折からハかの比男を
呼よせ按摩なとさせけるに追々心やすく来りしかた
隠家婦なりしや彼ことのと密に通し契るの交り
をなして或時彼隠家中けるハ此身ハ年若き人何屋の
人なるやと尋けるにさらくの由身の上の事語けれハ
きゝあへしハ我も江戸表親類の方へ此度出る事付んとて
日数経るにく同道して江戸へ出ぬ人目あまれハとく彼
隠家を出母ふきして与身出子の色取にて夜ハまぬ
の交りをなしぬ彼隠家ハ隠家の隠家たるより今

銀をもて法徳の御株をゆつり受く彼者を法徳に出し
けるに京都の孫なとに使りして男氏に法るを拵へ跡
あるものへ親けるか世上擬銀にて法義代の席へ
出しけるか今ハ右の喜婦も果し由方にあつしき乃
子つるハ右者女の子し内ハ彼男中年にて及ふさ妻を呼
取ゆハ来駕く枕所にて外の蔵ままも彼者女とのか
割し地ふしけるしやたちもそゝぬつき事也
　右ハ物を得く留し事
又なさまる迎力に角同業といつることの加賀屋家追
にて身上も回家くつしけるか右角田と親家の中

柔語りけるハ大角同の家にハふ思義の事有て彼家ハ
ゑらく放蕩にて手跡をきらひ捨ふぬき来しか或日小
日向樫木町の古道具屋にて小さき世話を調ひしに其
作りもよくまして恰好よりハ遙に手跡も出来しを続に
今百文にて調へ家来を為勤く我家に引取ぬ程なふ
同の紙詰ふとも被ま捨しけるを見もやらし其引取しれ
捨らんとをさしに餘りに底の手跡なる鉄槌にてたゝき破
きしに二重底のやうにも見えしか図様取しく板を
取りけるに底を二重にして大板の下ふ古今を書かれへ重
くり堅き詰にて改めけるに真筆百首を得し也彼らも

まより系譜を改め目録に写きふ来しとるやう其手跡ハ
今に角同の家宝として有し由也

下総の者ハ己未にて百石仕事
或人年久敷百仕ひける中有あり飽きて寛猶にて己を
まかせあるまなりしか主人佐藤家にて或年浪切
幕を落ちける者札さしの許へ弟子請れにてり家儀に急
開出来て大中下ふ手紙お除之れにきしけるか其日も
くまま敷ふ入にも洩して聖報にも漏しきれハ獨ハ弟子請
取出来ましけるか案年百仕く深き志をも気くるに
出来るとまへきことみにあしけ人をきし一つきけまも

云へされハ拘ハ出奔いたし候共一人ハ志まさるその
あり又大に後悔なしけるに思ひ返し其後の御事ありて
懐中より金子并れ其の書付を出し主人へ渡しける
かぬ申いふし正直なれしやと尋られハ彼下人申けるハ
私よハ賭を致けるへしといひけるをいよく覚ける事
事やと尋られハ此後もてる事申いふ程練成ら年
久敷合候ひ致ふ其中百両なとハ大金を持まつきするにあ
まて私も能きに合候ひ致ゆく我也も生込きん中ハ
此金銀をふみおとし在きしに断る程さし寸にて金子百
両ほと請取て帰る所を見うけ請らへく在りけるハ我未待合

生まて足をさ程の金子を懐中なしける事なし此来
かゝるとの手を手にへ手にまで取て見るへきにと今迄見て之返
あらハ生涯の苦しけ中にあるへしと存江戸表を立返
り在まて何方にも至り大枝を凱く浴さりしか清らく
考けるに主人も我身実躰なるを不振め致へハとて大金
の使をも命し致りぬ故なるを是程の実躰よ背き道
きんハ天命に叶かたき道なるへし情ちへしとて又築悔之主
戻りしゆ又悪心出たく危急の世を渡る事て百金あまりハ
我身の衣服にハ十分ならへしとて又ここに戻り我ハ思ひ
直して今ここへなとして此夜に乗るとも今さに迷ひける

幾事にも名利のおそはしきまに皆仏に決定しく
なき偽りぬかゝる悪心の一旦出しその后仕ひ拂らん
其よしなくれハいし事を授りるへしと云しまこと人も深
感ふして返々く此后仕ひたると也

鬼神を信し薬剤を捨る迷ひの事

去る宗日蓮宗の僧侶寄って祈祷をなして人乃病
苦を治さん事を請合甚しきにありては薬を飲ては仏
神の加護なし祈祷の内ハ薬を禁し護符神のなと
用ふへしと云ふにある様あり愚民婦女子にありては
信仰ある上の事ハ生死をとかり父母子弟ホ死さんと
ある病にても薬をあたへさるをかゝる思慮事や又旦
僧山伏の事にも己か法力の思験あらしきを知らん為
又ハ一途にあらしては感應なきといふもの也又ハ生前死ハ
まのあく去縁を取くといへとも生得愚昧なる者あり人
の命をかくたやすく仏得祈祷なる者なりて不審なき
につまれ害いふてて謀を免さんや言に拘りしきる故ハ
平ら高まる論ありに山本業といつるこの仲年るく大病く
しう四ッ五邊の祈祷僧の功験いちるしきを示してお祈
きらルハ彼僧も病家を取て深く快きを得ひなし我ホ
一七日いのりなは弦術の口よハ枕を上らんといとあく請

今しも家様の悦ひ大方ならし大通の祈祷料に曰く
初穂を被下其外書物袁をおくしめらるゝ日毎に快復致
なしと申けるに七日に満りける日俄に急病出きて彼病
人果なく失けれハ妻子のなげきいふ斗なし然る家へ
彼僧来りて此何快きうしと語りけれハ家内のものも彼是の
あまり祈祷のしるしも更になく守情ありし扨家宗に
よりて責けれハ彼僧更にふ審に存して有るへき事に
あらすとて祈祷経なとして妻に向ひ申けるハ我皆く
さし当りへ改さく義も生すへきなり夫宗業道を教く
病死にもあらハ未来往生疑ちに云ん事ハうるひ

なしと云しとかや

名にあふ盛検校なりし事

小石川白山御殿に千ノ都といへる座頭ありしか常に
其比なりけるにある山下を通りしに折ふし何検校とかいへる
よりきたりしに手引もなかりけれハ志つきりしを彼検校の手
引なきを急けるに右欺都宗なりけれハ検校大に悦ひて
千ノ都を引居させ座頭せられ拝重難き由にのたまひしい
つりけるに千ノ都もいのちく深く懐み云しきれとも何ぞ只
我きさりしに白山御殿宮家にて御威なりし故所末
覚悟といへることは通り掛りけるに無さく志また千ノ

彼者の毒に思ひ立ちて偽説しけるに擒捉中き
るハ法主入の義法花にハあらすとも實法の義にハ他の人法法
授ひてなるにあらしは法名なハ何とやらんやとあやしきまハ
彼此実説ると覚へけるに於て相ハ愚なの人也と思ひて
法身の法様粉にかかり免しきしめして許容なしけるか
あし彼奴を召連実説ハ立つかまぬ後にて手引に向ひ実説
の相の法同勢ハ後に案き居るならんと申し候大名法
様来の書集へしと思ひけるならんと侍るに申居けりし
人の浅くたるに笑ひぬ

高利を借まてこれ斬思なる事

世中にこる利の金銀を借或ハ日なしなとかし済せまする
ものほと浙思なるハなし日なしの銭なと借まてなさ
后に入し居るをも金井に奪ひ取りて借銭に借ける者
よし手元山に居けりし時手前なるに世間の女房なて
放蕩ことの者ほハ我えへも来りきりしか彼とこれある高
利かしの市姥に便り借促使なと誂しけるか或附書取
の借金もまに余り指市姥の居所に行きまりけるに夫ハ
留守にて女房そうり居けりしか一子病疫を患ひて
二枚折の小屏風に風を凌き寒天に立寄き據なと
おうけるを抱なし借銭のかたを申出しけれハ彼の

過り一子疱瘡にて逝去へきにあてゝも恋しく悲しきを
紛れかるやう泪なからに申けるにそ其の事に思ひつく
定侮り其嫁に託して申けれハ其嫁大に怖り如からふ
時の使やある師走の得足に見過りにて生や病人へ
見せし様にても引割なるへきなりと仕立けるに
そのく彼病の為にありて其濃か中条志らくの事くと
語り上面なしらへ我未来なれハ彼其濃来りていふの事、
事かなきへしといひけれハ彼女房泪なからに出て其
身のなきし布子やうのものを売りく金子其母授く
彼をのに渡しけるか極重るに託してそへし実きさを

志のきてゝも我子の様を取りに思ひきる恩愛の哀ま思ひ
やらまて江戸表の少年なからに請兄し其今の金ハ餐に
踊る乞地して持侮り其濃に渡しけれハ親子そ共に来り
悦りとて笑ひ定えけるか何まりれ共あそろしきに彼少
年も其濃く定りを殺らく其後ハ出家致さりけるを

王国風いたまある事

佐州ハ昔も元和以来　御当家治世に至りてハ金
銀涌出る事諸国世汁古より手ら術を極むしに其柄
来る年の金も稼つまて涌出るの地く金銀の稼に携り
ひとのハ味噌を焼ハ金子を減しゝとて国堺にある

まとしいへとも焼ミそを用ゆるも又只附の諸をおすも
捨るもをふ手足る候令を捨るといへる事を足るくの
事なるん強くハ生し出くるよりて或ハ禁せし或ハ用ゆるも
ろうす生せられ捨る事なるん

目明しといへることの事

古へより公けにも目あかしをきひ私にも中を一名おかつ
召しとり呼へ一旦盗賊の仲間に入る盗の業をしける
ものゝ罪を赦し悪党を捕る一助となせる事なり
能くよく元来悪党の上より出へ己か法ゝを免ん為計る盗
賊の居所を知つより斬くの悪党を捕へ申さんなと
いひて却く罪なき人を捕へ己か法ゝを赦さるゝの類
多くありし也　有徳院様御代より目あかし引目あかし等
の事堅く禁せし給ひぬ強ち其頃にハ至て法も急役
をなしける者も尾州家に仕へしその頃のいつの
比やら元来盗なりとなせるうちに生ゐを改しを同心の支
配に申付て盗賊の防をなし給ひしに或日名古屋
の町に与力同心の勤ひたの者を召連御用に出かけ
休息して居りしに年比五十余の禅僧モウスと
いへる頭巾招の袖をかつりて使僧なる人ならん何を為持
家僕なと一同にて二人にて通りしを彼目あかし見て

あまハ道織なり石摘などいひし出家の事殊に
便僻なりとの石仕もなき身まハ簾魚のやうなるゆへ上中
なる下たる人の出家と私この古上下をつけるに階級
なし使僕高人衣鉢の見ゆり出家にあれハ尚まく
鈍めしあらゆる同じ言葉て智様へなるに案のごとく
使僕下部未迹出きしを石納石摘こと僧のモウスをする
寂しなる下たる賤の大奴世俗に以味なしなるまて
中所に徘徊なきる大道織にてましとも又盛附京中
の見き人に説自あらしを石連て物語なりしなる附寺
ハ古へ道をなしなる由何そ寄てつきとし中なれハ目

ありし字て今ハ新のめく石仕ハれ妻子をあつかよるも
そと偏にてる衣の賜け形と事多きしるにても古への
この説なし言ひし廓この事に沢山を以て走し
法目に掛へし代議を松の先に出家を返し以て跡にて
紳なる手ひるへとして所と一所に歩りなるが悟くを
て吉婦この家道承へりとふて見きなるふ大きなること
書出や法を道て見きなる者皆な大に驚き新なる大
なる家をめやすし道しやと言なれハ古衛戸物店
へ各言葉形りし附手に持し編笠を持法の上にかぶ、
き垂れ歩りなく附きりたちたるに編笠持出さりと

こつくり役代銭を償ひ払ひ湯戸ある屋へ出し掛ひたるよ
せしむやうてハ右のまゝ居たる族失せし事を未来ながく
定めしとや

若償盗賊を殺せし事

下若どふ店といへる所に兼義院といへる寺ありしが浮去へ
盗賊入しを寺ふく人が族付へたる若償見付て盗賊とよハ
ありしを大盗賊むざと殺さく事より若人なきハ何の
事もなく取て押へ手拭を口へ押込たるに居り候ふ
盗賊ハ悶絶して死たりしを翌ち吉に訴きて寺の人も悦
次まて存生ハ如何にも大気の男役若者を押へ諸誇

存て死せし者ある者を引起して見るに絶て有さへ
らぎし其方そとハて盗賊の證書を持たりしとて始終
たる事をし者なし盗賊頭に家を失ひしとや

盗賊徒よ刃らさる事

予備役を持て居たる所牧野備前守宅まりの節
掛りまて書鳥ある屋といへる盗賊の此味せしか上部
武列を謝四さる大盗まて所々家民へ押込津盗まて
其し其罪極りて傷きる事をいさくる傳さりし或日
あるりの備役居たるハ殊も所々盗をなしてあるくよ
怖しき事にも違しやとこたれハ都く盗賊の我何殺

同類を催してもきつ戸をさゝし逆入りたるは帰参相
なり一旦内に入てハ御おそろしき事なく掏を取得く
立ゆるんとまうけし又帰参せるなり妻子所押込置
織なし行る上かの者と見へし盛七後へ立入しに信
備の居たる襖を明けるに信備部屋より逆織来やとて
半押に急し半刀へ手を掛然ると思ひしか譯に二ッに
切られし心地して足に任せて逃出しに跡より追ける
由にて半丁斗りか同類共も命限り十町余も山の
内へ逃込しか程なく思ひつゝ追ひ来る気色もなかりき是徳
ある出家にや彼帰参事にきし事なしと聞ひぬ

狂哥流行の事

天明の始より東都におゐて狂歌流行しけるか色く面
白き俗語を以て詠出して四方の赤良阿気羅館口
節松の内侍なとゝ名乗て集会なともなし由四方の赤
らハ大田氏の家臣とも云し由右狂哥ハ万葉集なと
にある板本にあまたハ載しぬあつめて新夜の七十卦賀乃
奇なとハ面白き歌多に記しぬ
七ッ屋を十ヶ集めたる数ひきて如ち教しても死ぬなくなり
阿気羅館口吉原に相く居續なとして悔しさるを
書留るよし

新島門内ハ野しくなき山桜ちりすハ庭にハかへりさしほし
吉原町に至ハ中の町に桜をうゑて花客を集る事
なきハ大かた桜を掘入て根に附しの花にてあらしる
き有様にて読しぬ
出家の者も自然と生業似に任る事
出家人にて本寺の坊主なとハ當世の思ひ付をなし或
大山石尊之事納物なりとて異形の物を拵へ町々を
持歩りて銭を乞て世を渡り其でよろさをあひ又ハ
辻くにて代参の由にて錫杖を振く一銭二銭を乞
再同様の者く能ら江本寺の悪む年又兄新様の勤

氣を請て此者ひとく集まり多し然るに諸芸師家に
大のことみな修業するものなくて既ハ勝手流のこ
いつり寺井大物見寺社まりの者大勢人一人近しく
仲間の者旦那寺のことみな手揃に多く由緒に然るに
まり所にてハ既くる者の修営なくれハ承知之事有
其訳寺社の役人ふて理解を述べく申渡しくれ共元来
頑愚の氏徒一向理非の無へなく　公儀大法をも無へ
其影に乞ふ了簡のことにて嘗て承引きさりし有様
解死を得て其後中々まに解死二三之中徒叱りくれ
ハ寒口して速にこ侮りぬるを予當役の者まゐあまり

又傳りきゝし大法師の修場中にていつることのさしも罪を
看板出しつゝて堂奥大海を棄とし多錢に窮すれ
時ハ日々々きらい時々鉢或ハ下常を院にいるやうなる
事の支あり
此等錢を院につかし者ハ修場へ受付るとも素足にて
出るものとし世に利なるゆへとも仲間の指に當を
たつるもあらし
予か屋敷にて法師とも修屋敷にいし或日予か住居を
清く美山來とて秋元の家士にいし修僧と大の修
場中にて論の上手擲によし本と踊方ありける中

うけて大中にて當三人印ふとて美山か玄関より手擲に
負ける家にて修場法しゝ親々敷し勢ひ應じ〳〵強き
あたりける美山大に雑言して則大法師の家来と
兵卒を中傷しけれハ大修場中にての師の中ちいさき
家人來りて一通り此りすくほめりけ指中けれとも何分
海に酔けれハ飛ふ錢を波の文引捕へ玄関家へ投出
して手に余りけれハ彼らに引てきき屋敷へ連帰りぬ然
指手弱くとしけるに叙文出しに彼大の所を来たしさま
大の男を小児のやうに扱ひけるゝ然ハ此の事ハ自然
とる者ありとおもいしかりき

人の貧福ハ人作に不及事

備前淨根湊ハ只船ホをもて家業とせる者多く濱田屋某とて至て吝嗇にて追々家富けるに隣ぎりの岡屋某の内にも身上おとろへのものあり年々追て衰へしかもましかハ彼濱田屋か吝嗇をち地のうみを憐ミて渠か船ハ難船にもあひしと思ふにめ同年の運にや又ふ条なく外のものゝ船ハ難船なとして損失有ける上濱田屋か諸ミ引受船儲ホのいたしきをち地のことをも憐ミ持渡りせ時おのつから美きなせる者中合濱田屋に損毛を掛に押して難事し船の帆柱を二ツ三ツに切くたけとて思ひ留りけるか翌日ちに濱田屋の帆柱を見ひて切しに右ハ船くしてと年あつらえし外も船持の帆柱にてなましと亡地のもの語りけるよし

備州国三郎狸の事

備前相川の山に二ツ岩といへる所を彼家に往古より住る狸三郎狸といひけるよし彼地の者ども幼とふく中慎くけるなか古き咄を施しに語りしといへる事をおくれと古来より中傳へぬる由之享保元又の頃役人の内古澤三郎といへるましかおり門にて狸をとらへけて追ける事を技手に見せを書くりしよし

此等猫ハ陰ふふ乗のまゝにて家名断絶せし也
猫らに芝町に何某といへる外科ありしが都にて
息の病人ありとてかれを以て迎ける者何となくいたくも
加ゝに棄りしが二ヶ年とも見申す所に門をあけて家に家
居ぬ見て家〻に入りて出て来て子供家きしよりて
え忠よつくき薬ありと覚ひ厚くれを施し癒しける由
猫をよく生け薬を所に来る年もなく厚く謝れ方を
こともなしける年毎に又治んと思ひけるが筋ても所をも
らぬ猫ろく皆ぬるにえ其の療治なしける八堂之
帰る子狸にてありしや実にも人倫の寄端にあるべしと

語りし由国中に語り伝へしとせ

天俄に狸を捕し事

佐渡国ハ牛馬猫犬鼠の外の外獣猶なし田畑を荒
すつきい猪鹿もなく人を犯し害をなせる狐狼の外も
なく然れハ庶民も牛馬を飼ぬ猫ある事渡山の穂き
猿あるよ鞴（フイゴ）ハ野の家を掛る中なるにふいごにハ狸の皮を
なくてハ出来難く猫のよ外の物ハなけれ共佐渡にハ狸ハ
多くありと古へより今ありて放ち飼ふせしハ
ともたるべきものにもあらねど自然と狸ハ多くして
金山用を弁しけるも又ての今今の猫らしむる事

あつんれ

天氣論まることといふ事

住吉郡泉州府といへるハ西くに洲崎あたりの所也鳥居の東の
湊よ當所の役所ありし時因所浜辺に御蔵ありし所也或夫船を
引上るあたりの所かる有浜辺よあり又る所がある
中なかに田三夫も因あたりしぬる有る浜辺に至りける
彼の邊のしぬる河のかりとおもふところに霞の船流き寄りけり
怪しさて大勢人まをかけ引起しみるに濁きのまゝに
流れしとみえぬなかりしに第一番の船ハ船中よみえしが
早第よ浜府村と誘ひ見しぬる有物ハ此船り来たりし
といひける船なりしとて早村方へ知らせを速人来りて
段々に遠くなりしとも古き船を大川の町へ薪を積
出し居の吾驚き沖にて難風にあひ川来たりきて
集りし自然と此の案ずるにかくのまゝとなりしき
るとみえたりし浜邊にハ折々かゝる事の由語りぬ

精心にて家業盛なる事

江戸四ッ谷に松屋某とて大小の捨るものを生業とせ
しにて来て其家ハ武家方へ出入しける
うち細工にてや町人と集て四ッ谷の辺に古庵
丁古小刀を手にとる物を座の上に置へ商ひけるが

其頃用事有之て刀研さしの柄を巻又研ぎ候て仕
馴て四五年の内に九尺店の拵屋の名を出し候ら
風と思ひ付て私く拵屋にて当山の柄巻をはこぶに引
下ケ十山の研儀をは七山に引下ケ候ら夜自然と新人
も多く参り候大ニ渡世仕りしを近の武家衆へ
引れを出し候ニ四ツ谷麹町の拵屋共大ニ憤りて
商売之仇の様り二集り内ニて寄り所へ訴出し右候出
吟味の處諸之の中候ハ商売方直段下ケ候ニ付私
仕候ハ宜て悪敷てまヽ之候へとも悪しと思ひ候ハ武家
方より誂へて有之拵物し私拵候ニハ右の直段ニて無

候ニ利徳もなくて相應ニ相續致し候也いたき有之く言
直ニいたしゆてハ見世場の難義出来く候て寄り合ヽ
ニ仕付候とも私拵之候ニハ何ニ右の直段ニて出来致し
候者申候ヽ夜寄り所ニても尤ニ宜敷く情り之解
ぬ事ハ何よく家業相励ミ候ニ付四五年之の年始ニ一夜
二度用事申付不し見世場へも御年玉を持て参り
候ら四百形ニ及し由を後屋敷家中の拵ましきし
ニ大売の屋敷ニ付く大名の御用をも相仕付候ら御持
参ハ屋形御用といひる札を出し其子の十四五人を
抱へ置て當時の拵屋と申し由大ひれ当の人語りぬ

一 前表ありしとも難極事

明和九辰年の江戸大火事ハ誰ゝの知る事なれハ今に
日光神橋の掛替御普請ありて御修復有りとて新宮
被仰出御目付にて東叡宮様登山ましましけるに或日
日光新宮にて十社事といへる社にて神楽ありて安士
をも大勢居りて見物しけるに一つの鳥虚空より庭の
ことく新宮の白絹へ飛来りて安士を始め見物のものも
立騒ぎて見しるに鷲鷹の追し気色もなし夜鳥ホ
も追りにてくくれふ思儀第一といひけるに併学説伝ふも
見物の席にてありしも眉をそめ鳴呼江府にて何そ

驚りける事にても有けれハ宮参といひしが翌日に
至て江戸より飛脚到来江戸大火の告あり新宮并
東安士の江戸屋敷も大焼にて速東叡宮にも
従ふ諸列といへる附語りぬ予日光山の社人大十
社にありて見物の附も併学説出席ありして大の噺
を併学説語りぬ

神明浮遊を基として始る事

日光御祭礼ハ年々賑々敷ありしけるに就中も附く
相見ありしけるに近隣近村五里十里の外より老若男
女競ひ集りて木の枝棚の新にて群集して見物き

事也　神輿渡御の時ハ賽銭百貫のやうく些しき分ハ
大地もゆるを実ゆる程に銭を蒔ごとく諸人或ハ信者
銘より出る百姓の御輿舁或ハ見物の小児なとく拾ひ
けるにて大に乱雑に大賽銭も賢などなくん空て信
者へ納るへしと申けるに大に乱雑へく　渡御の乱
執しける賽銭一銭も信者當へ納る事にあしくしたるに
拾ひしその年日の俗会の料にあてたるにて寄附
あり大賽物を拾ひ出す儀となし　或ハ俗会にあてしハ
諸所渡世をなし然に有くその年中なし又拾ひし
銭を少しまてもそれらの諸へとあてたるにあまりハ急ニ四計を

祟りしを幾度なりけりと語りぬれどもまつべき事と
思ふに記しぬ

三峯山にて大なとかる事

武州秩父郡三峯権現ハ火難盗難を除給ひし所ゆへ信者
まて諸人信仰いちしるしき大に當山ハ福所にて信仰の
霊験信者野家の其新の不當なるにても参り日に付散て
寄進られハ不足なりし由多くの内にハ盗賊なともまいりて
年々参詣して出さんとするに或ハ乱心し又ハ怪
我ふ立所神なとに集て出る事叶ハす信仰ハ勿論
信者の信仰も大に当山の内に金子を納出んとするに

必祟りありて一族も払出る事不叶福含まきひ移る
事ハ強く聞もなきよし彼山之ホ寺の老僧語りぬ且又
大之峯椿沢を信し是狐火狐除の守護れを附与き
る時夫を借るといへりまた夫を借る時ハ是狐火狐
の然ひなしとて数部中賀なる事之武人夫をかり
ゆきんといへる札を付与せる斗也実の夫を貸すト事も
なるべきや諸所の冥感因まさへきる事を載せされハ
不審ここに記念して附与しけるに彼老僧下山の時に
の狼語に出生を付来るを大くに怖ましで神宮の
いつわりなきを感し狼と付ひ給ん事の怖しさり

之悔りて志らくの詳を語り狐ひを怖く札斗受度
よし頼ひけるを不審又出熟を祈りて付属なしけれ
ハ其後ハ狼も目にさへきらす法なしとそ也

明法の祈祷其依る霊験の事

祓て大僧正ハ其法いちるしき所帰なりし内戚附富
家の姫君悩みしに彼姫一ト旬なる中縄の角に睦怨
として千三界す事度く也当寂大に驚き狐狸乃
なせるわざなるや又ハ成仏得脱の身となさる為と
歎き悲しく誦経読経なし又ハ祈念祈祷をなし
ぬきも受不出終ちなけれハ祓天いまさ飯沼の弘経寺

にさし附役功能を望みて請しけるに於て中けるは
何方へ出られ候ふ日く所を知るやと尋ねけるに日く同し
所に出られよし語りけれハ我等子迷惑致さき中へ
しとて大江卜万へ弟子を所望の為諸によふをおこして
役一室に入て諷誦なしちきし上大宮其の日く寒く
なるといえる事さへなしこえるとけ於て自身として弁を
致しえしに豊事勝負なしを一度に所く去るに火
鉢の中へのあつきを以て煙くなしけは成出る事も
なしとりひしに果して今は八怪しくなかりけると
なりし娘のつらに男なして豊書を以て弁に隠し去

しより仏掛り致りてかゝる事やと仏付し涅槃の形状
あらひなきこのつゝみ覚えたるにあしは形様も有様なるべき
道理なり

一旦道識の仲間に入し是非僧の事
弟子方に仕へし吉田未だ不熟なる居家に仲間せざし
て実形不揃よなりと偏し去しけるが彼是れ一旦宮様ふ
皆立て道（スリ）の仲間入なきしうちに識法名字を受取り
て大仲間を立させし中にも多くは香道を新きこと御
よし大の古料を立し上けるは神田辺の町家の悴共に
入萬し集しう程に道（スリ）の仲間へ入て毎ハ句論の勧め

一旦勘当なしけるが生母深く歎き何卒楽ら乞を
頼み人々に立頼ら叔母に清子訴言へ来詰なし
きけるに哀なる身なれば清料訴言へ来詰の初
につら途中にて彼者に逢ひしに母もかく乃事
にて歎き悲しみ孫に何とぞ乞を首尾し人々に立
頼り候へとも中々それハ彼是ゞも涙を流しいつそも
我共も立頼り度くいひけるからハ我と同道
なしくらは乞を頼め母の許へ立帰るべしと申けるにぞ
歎きを書なし己つく拙者をなし連頼り母へ勘当の侘を
なしけるに其母も大に悦ひ豆腐商ひをなしけるに

大商売に精を出し商ひの外ハ一向他出をせず一両年
過ぎくあまり浦子訴言へ来詰しけるに其より仲間
より今は家ありとめ取致しまつやと言ける母の歎き
既に止ぬくまじくの由語りぬきハまハ先年余りとて
皆くなりし昔を語りそれの其事の對面なり涙下に沈んで
涙店へ立寄るまでにかゝりしきゝにハめったに家に来しなり
其より吉京町へ入りて其者ハ拾うんと請ひけれハ母の
事ききを伴んと辞しけれど近辺の事も若しかるま
しとて訪めきたるにいなみ難く吉原へ入りぬ楽らせ
身のよするにて今沢をききひ拾る事なきハかくのごとく

酒食を奢りて歓楽んとき、時として不足生じたる売女に
偽りして補ひんと他の衣類を盗み人の残へあるを奪ひて
不足を償ひしかまたり又吉への悪業に赴きて又は直
道の仲間に入りて終に　公儀刑罰を請しことかかる
ろすをつくしきしたる彼中間は一旦手前相別へ引込八年
るて江戸表へ出しに家業に立帰る仲間の者もあるらひは
死し或は刑罰を蒙りて家なる土地なく流人たる乃
中にのりしと云し中を大方目請りぬ

博徒の勇気生気性の事

下部に行て竈少をなきる法下手に立帰ることの事へ
昇り噺し作るは湯島大根畑の豊女屋とやらん云ふ者の親
分ともいへるもの方へ出入して竈少掛に取りし家彼業中
作るは仕置は其仕合悪敷講に新高也何して家をへ
ほし中着へ兼て非法の松の新鉢をとふし揚りしと新作るゆへ
よりは大方法下手を重て何地やら出行るうまでは布子に着
子羽織なくうへきて小児を祖母に面ひ作るに坐して足
のように向体二三羽のをきつよ高日五百文のきて移相と
して法下の方に立出し作るをくてより彼婦人好と遣ひ
羽折も布子もなく東風新債服吉移牛をもらし小児

なと八矢張外に面白ける様なる者と清水辺まて今くあり
身の衣装を繕へして移稿に調達なしぬると思ひけれハ
彼女房に向ひ我もまた今日始ての新人なれもなく書年の
別深なり祈禱けれハ今様よいのりとつきけ謝礼にハ及
ハれ追て仕合のよき母様し扨へ小児もあるなきハ知るに
身を隔つれ見張へと云けるに女房更に合点ゆかざれ是非
くと頼ひけるにそ江様に是るに行き去りより書町小川町
市ヶ谷牛込辺の片羽場を歩行りて帰りの節も大根畑
を通りしに彼方の内外の糸繰りしく燈火ハ明るく川と
あく灯し鰯年目を料理し何か語りしき有女何なる事

やとつりを聞き只今我等も帰りに清水も帰り扱ひ
しやさ於りけれハ女房早くも心付て能在家扱白つまらず
まよりなつとこ云し夜宮子書に及ざれハ市へもいそく／＼と
取りけれハ清祈禱の様も見こまふ上り扱へとも江戸よ別
のしよ女房を見の姿とハ違ひ衣装をみえし、中々見え
し気色にハ引かへて帰りきのありしまて酒肴を据ゑ置き
帰りしに博徒の集ぎりひきおとしき物也思れ女房にハ
鬼神と俗諺の通り、中々恐れ気性も又すさまじき物
と語りしよし也

深切の祈禱ハ先達らしき事

そしの事出し漢方本道の事なる由生薬商なる
その申しゝ薬種屋にハ斑猫といへる毒薬も種
物を其所に隠し置て猶あきハ殺毒又その由
種々とも容易に売買ふ致事ゆへ其所烏頭根の小毒
の薬も人の害をなすものなれバ売買ハさせさる事なるに
或日其男其所へ出し皆やすき一人来て斑猫の
毒をハ売渡し帰りき烏頭根の毒薬を望みしに店に
居たりし小丁稚何心なく商ひし人ありて其事を語
りたるに大いに驚きぬ右様の毒に売しや名所も定しや
よく弁しぬ名前も定かに何方の人なるや年頃二十斗の女

小丁稚一人つれて調りしと云しなれバ驚きてこれにて悟
れる浅草観音へ詣て一心ふ乱しに右の薬人の害になら
さる様にと一心に祈誓を掛て祈りけるに年頃二十
斗の男是も信心とみへて読経なと致して一心に
いのり祈りけれバ風と是連に来しに彼男申けるハ此
身も信心渇仰の人也常々観音を信じけるに我
少し若年日来の事を語り心配の篤なと語りけるに
薬種屋是へ来たるハ我売りしハ身に覚へハなしといへとも其
このりなる大毒にて一心に祈念なしといひしに主き
め何来事や偶に力を添んとて申し有程りに人をとな

けれハかれくの事なと語りけるを彼男ハ生女の年比
見し彼婬女の様子を見て先刻の子人の戦気を感ひ詣
信心なしけれいかて感応なからんや我宿ハ何地なりと尋
ねへとて立出ぬ扨彼男ハ茶屋にかへりて宿所
花門戸へ帰り入口ニ而して見けるに浮衣を干けるに風と
心付てみけるに浅草にて茶屋の娘なりし様子を見たるを
遠ひなく女房此年婬女も倒れけれハ心に不審を生
しけるに生妻茶を運ひ餘菓子抔の物を焼てちや
くなりしとて出しぬ程なく不審を生し餅菓子
なきを渡すとて我ハ入湯なし来るへしとて浴

衣手拭なと持き風呂へ行り彼丁稚を人なき地まて招きて
餅菓子代ㇾして何方へ行りしやかて妻ハ女中出来るを調
へしやと申けるに丁稚も隠まへきれ子も志らす孫ハ其の後
に浅草へ詣て茶屋にて物を調へし事なと語りける
なれハ違なしと逆上に浅草の方を指し走より其の女
ハ入湯なしと立帰りけれハ又妻ハ茶菓子故に抜出し
詣めけるを彼男大くるしを女房に止んと指にて中けるに
其身ハ始まさる由を云けれハ其りハ存せる旨あれハ親里
へ帰り申へしとて彼くるしを帝に入て人を付離縁状
を認め大に新かの詞ハ此事の菓子なりとて送り返

しれらしこ也まてより太の男ハ薬種屋と兄弟のむつまし
て観音薩埵の利益を感し信心他念なかりしと也

　上野清水観音霊験の事

昔清水の観音に主馬の判官盛久とて平家の刀
深く信し参詣する盛久の信するなんと人〻いひ
けるに平家ほろひし後詣りけるハ太の縁こそと盛久とらへ
捕ふる時ハ昔事なこゝ盛久にあるまてあの縁あるに付物語
ありたる大名の縁をうつる武士なる役義の事に付私
秘の事ニても見しや味ニまて死罪に極る事なり
しに後妻深く歎き見て清水の観音へ詣て妻の上

万をと百篇つゝよりて一心不乱にいのりしに髪乱れ乱し
面も垢によごれ見る姿もやつれはてゝ一日も厭ハず日々
なりき祈りけるを或日帰つてに太の清水まに詣ふて
彼女の様を清覧しいゝ来たるひるやと人を以て扉
ひしまさらくけるし中上けるにこそ哀れにて使と思召
けるにや清使僧を以て彼詫度の許へ申付ける八阿弥
事罪の様ハ清ほふあしく及極悪の事なるもありし以ハ命を
志すけ給ひて清水へ告けるにこそ彼詫度にても帰つて
の清水へ世様の助命追放に告しと也さば彼妻
偏に観音乃利益なりとの様を語るにして納さする

ありしと語りき

御門主所徒の事

何某の御門主れ法師なりしがある諸侯の家士不届の
事ありて死罪に極りしが既に刑に行はれんとせし
附役罪人の親しかりしその一人出家を頼みて兼ね偽
り書を携へ彼諸侯の許へ上野より御使僧の由を
以て右罪人助命法親のよし申入けるに早速右の事へ申し
けるに家法を侵すのみならずつゆるし難かれど
御門主の法親王も挨拶とて助命して追放になしける
か彼諸侯より使者を以て上野東坊へ答礼ありしかば
元より御使僧も出されざる事故其役人へ告られども
答てさもありしそのまゝ東叡山の使僧といひ偽り
御門主の命を仮し偽りなりと申訳申上けるに御門主
ら仰けるハ縦令此方より使者を出されし其上御の命といへ
へハ助るまじく知りて偽りかたり人の命を助命しハ至上
堅より助けきたりし也法親の執事にて脱へと乃挨
拶ありてへしとの仰にて生捕り置て渡しゝや法中の
法度にハ許もなるまじき事と親王の所使を命成しけるとぞ

生まれて悪業をなせし事

神田辺に吉何某のなれなしし彼侍十年斗の役

ひに出て堀りけるが流しの下の地を掘何か埋る跡し
母是を見ていふなる不やとおそろしくに銭なりと好
みく埋る跡をみなりしに銭百文斗を埋置ぬ依之
捕へて家母拷問なしけるに小児の事なれば銭を
隠さんとまて行る事あるべしとは思ひ通すにならず或ハぬり
あるひハ悲しみて是を刻しめるハ怪しくハ止ける
なましく又く大猿の事をも十四五歳に成て孫莫らく
きんうるなく追出ぬきハ書ありし仲方入して果たは
仕事に出しとらや孟子の性善の論諸に名をあそ思ひ
居しに弟ら為人の子に聴かして手跡ハ実思慕の

門にのく国つに吴帝の名を揚し出を誇に一を失
てうち悟る神ふ見しか迄の癖ありて性分に及ぐ女
親も捨置新く一子を動当なしけるを悔乃ありけり
是へくりし先学賢の清くしる家多くの人の世中にいふ文
まく事なや

玉石の事

所清の沢にや見しさ町の田家の石出たるに去る
石から不刀水氣湧ひ出しを庵へ入て右石を賞ひ
座よし中くれハ子細なるんとたく人是をおしと
右石をへを取帰て見れハあしに冷なし所に湧ひ出

の出るにて是ハ果して石中に玉ありてそれなるへしと云て
試みしてぬちより連てるに研ぎけるに過りて寸割
ぬ、其石中より水流出て小魚出けるか忽に死けれハ
有様て歎しぬ、其年跡にて彼唐人せめて涙を流し
て是を惜しみけるか委細語りけれハ大ハ玉中数へさし
こそみえて大玉の様きさるやうに静に磨上けぬれハ
手今の魚猶有り惜むへしくと云しと也世に熟竜
なといへるもあひもかくる猶有へしと彼地へ去りし古
ことみえつりぬ

樹木そのに依て光曜ある事

本所清水院の役に樹木屋多く有しか或日老人
一人一両僕をを連て大樹木店をたありしか一ハ乃
古屋売に於の様く見しをみて惜く立止り價を
問て前に致か可る株をた請し存の外ニ料り
莫くぬきハ大方ニてハ買ふへしといひて立去ぬ又翌日
彼老人来りて於價を増て申請くしとぬしか何も
家翁の志に非ましてハと猶不売其色をなしけれハ
於又惜くめて立帰りぬかる事一両夜にきけれハ
ころ主能く大於をみしに枝振よも両ひしゆゑて
高料に売へし其思ハさる不可なるのそ保生けれハ

あるまじ彼老人の日毎に来りて其墳木なきてハつれなく
思ひけめ男枝を其さんと石垣をも新しく築直しに
仕立し彼松を植替けるに古松の根より一つの蘗生
けるを近ひ失ひし跡の松を立派に植直し日頃
来りけるハ我中其墳より直境して調へ殺りんと自
讃して詩ける老人思ひして来り基の松を立てさし
よくて立へし夜業因して松を引きけるに老人大きに
驚きいろなきハ新植替しや古松の根より出し梢も
ありへしそらの其根にてハ計松一株にても宜なしとて
て帰りしと其宗家此老人示来噺しぬ

利を貪りて梅をなくせし事

予が大父の召仕はれし者ハ浅草辺の同心なりしを清め
し迄桜町ゟ見えし彼辺の同心なりしハ植木を植へ好める
人にハ價を取てきしけるまま多し彼者或日庭前を
通りしに梅木のいさ葉一本ありかしかしかるさる梅
木なりしをいさ葉の流り好なきハ早速石垣に
うつし植へき由ひ重しに鬼子母神の前なる
十日以内にかく人多く通りし因彼いさ葉の梅木を見て
調度よしと價を請しけれ共求めし言く売んとわれ
今きりしにまやり出しの筆なくまやかりしく日ごとに立

つく虫塚を付けるに妙ハ百洞より浮く上りて千百を
羽に付ける者ありて元来酒を好みけるか家毎酒銭の
助けと大に悦ひ何事も助合ともあしきてハうる備しと
思ひしに或日地震して茶戸おちたり彼松木も損し
跡を打割しある大に驚き種虫しなとしけれは大師の
事にも果福なきハ是非もなく彼松木枯れて失ぬと
彼をのまりて語りぬ

古銭の人手に渡る縁の事

唐にても銭翁と称せし我親にてハ持たる金を秘しめ
ぬる何事も手に銭を得へ黄金を持といふてもその合故ハ

多ほ也天下らちまる冨家の翁折居にて云しハ世に金家
人ハ更なり先祖通途の者とも富に金を貯へきさる者に
手をを持あつし金子を愛しなにハ持しめしいつれ見へられ
手を借ハ名にも金銀あまりハ何そ衣食何も不か四方物を先
あるへし我ハ器物に先かに先身仕用に不あらさる不ハ金銀
に替るへきとハ思ひたる是器物より金銀を愛せさるを受
なきなりといひし又或人の語りに聞しけるハ金を好
むに思ふや何程おしきと語りけれハ多くハ有なし子孫
ほしといふ者けれハいとあさき事にとて子孫に金を
わたさき大の内ハかくし物なれと甚を丁寧にたくして封

方をして是を箱の内に垂給へと云けるを忽隠れて
蔵に入垂ぬ抑金ハぬすミして出来るやと問けれハ佐兵
則手前を封して箱の内へ垂ぬ是ハ幻術の金払之
と云けれハ彼男大に悦り大かた術を手前の封にて
垂られハとて大かた術を以て抑を詞に半もなしに
諸に小児の戯事をなして人を嘲弄なしぬること然
あけれハされハとよ金銀をきらんと思ふてハ金を拾き
ぬことのむつかりと云し故金を拾ふくまつるになし手拾も
満出しこの外に彼人請まして出しよく本所に有る堀に
金をかけて渡きまてまつるし由兵衛紙袋たなきまた

手紙の為に詫候歴々よりも本き家来をまして詞
書を彰しけるに武家士勝百金余の借用を申こと承
なる付日にを約束し手日より或り家銭金を借請の
半を諸しけるに承家の内にて手前屏より下をそへし
箱の内へ入けるか悉く忍て立出て折角渡出あまりとも
存日ハ悔り預けるへし此日渡出を待とも中々にきき
彼武士中々ける八朱金明日にも来るへし是を扇ひん
よハなくけれ手紙のまひ金子ハ片時を争ひけりにもあ
まハ何とて其日借用いたし度て彰しくれたる何か何公
なさりしてハいつ来たるやと猶しくに金子にて借様頼置し

かくれなきハいやとて仰出され難義中々にて彼
武士も大に驚き恐り入侍る者今ハいやとや
つまり謂なしめで出来ぬやとあやまれハ家にて助なしと
いへとも我ほうかうにいれても今ハ生害を可と思ふハ則
其のいやに思ひなりと語りし由其ハ誠に古跡翁
といふへきものなるへし

本庄宿鳥居三太夫が事

本庄宿に中屋三太夫といふ商人有りし此年の本庄宿内
を村の困窮を救ひ往来の助けとて往還の石橋を
自ら入用をもてつくり一説に代官義兵衛の助力出し

なき時勘定組頭を渡しめて其中寸をとらせ常なさし
他の家業を勧其中まりの宿所役あまく何の上苗字
帯刀御免にて時ほうびありしその也右三太夫ハ元来
通油町中屋といへる呉服店に丁稚より勤めて帝を代に
来りしに右中屋方之幼年より来て身上大に衰へ亡り
難き時に来りしに彼三太夫か主人に申けるハ当年ハ白
子上京し分へ引物斗を仕入拝下り候へしと申兼へ
主人も其通りになしけるに下直の引物を関東にて売捌
しに利あるきなりしもあつきなる上三太夫自ら上京して彼
問屋に申けるハ若輩の主人専に仕入下りしにめ何

なきハ引物斗を売渡のふやといふ家中なるに問屋に
てもこと人妬くに仕きりよし其へなれハいやとよこ人其
業幼年より申す也幼名の者並何れ中ろへハとて引
物斗付居しなるつ年々家別深の問屋の鉄身にハ
ろへうりにく人物をつくりて商ひし故にふやとなぞりなきハ
手取に仰し年々家ありなきし問屋なきハ殊に
損をなして前後に代物を下しける依之大に利徳を
得て中居の身上を取立し其身をも主の元手を用て
本店へ引込呉服等の諸方の商ひなして大の暖簾
の下 中ム やまつ付しを彼これ三丈の地め何来許

やと人の悪しきに中居ハ家名之利のゆくゑぬきハ風気と
いふる文字世風ハよく残つて見きる事なりと云し
とこ其道の者ハ物語りぬ

道灌歌の事

太田道灌ハ文武兼備の将なり最愛の男童二人を
て其寵甲乙なかりしに或日其童側にまいりしに風寒く
落葉夥くの男童の袖にちりしを道灌扇をもつて是を払ひ
けるに一人の童是をみていきなる鬢を始めるものを
て歌詠しける
吹きちれハ思ふこゝろやなひくらん扇の風を人のいふも

菩薩花をそなへて

出すりにハ摩ゑもつ常し一人にハあつき風をもいとひしとぞおもふ

撒物志を失ひし事

近年ハ菓子或ハ油揚の類に魚物まのあまり似せたく
実にはよそに見ぐるしき経にて是を古ち侘にて見物なる法度
の法是にて来諸の折から其の菓子を食出しかるに
魚物に似たるをなにやら手を付しまうけしを信仰まま
魚味にてハ近年を年根出しけるしなりと見られハ
諸侍座中にてハ出家ハさらに信人ハ先祖の忌日なり
とて猶て魚味をたしまさへつきるにあらにされたる閑侶者にて

精進にて魚物を忘ぬるハ情なしと我も先祖の法
会あまりハ逮夜より精を潔斎して法事なの稼をも
禁しめ来諸なきしも我にて魚物を食する事なかり
しかるに今般そなきやし也物を用んハ法の汚となりたる
なり應なくハ死去の魚物を用る方ぞ増なべし
祭葷ならりと申なと破り立帰り申しと也諸侶者西方
して真よくハ死後近く去らる家族をなぐさめしより大ハ
於年太をお勤とも当日お接する類中の時もむなしかろ
けらくさりしゆえ何ぞへき事と云に記しぬ

精物なん得べき事

或年諸侯より稲葉家へ月次の送り物ありしに大樽家にて
披露ありしにて甚興ある事なりしとて何某平氏の諸
侯へ平家物語の屏風を送りしんハ是にも違ひ趣ある
の下りなりしんまゝに付おかしき噺ハ宝暦の比稲葉家へ急
て申込みて屏風一双名筆の認めしを添る諸侯よりし
に彼稲葉家より移徙の祝儀と附めける稲葉へ大器家へ送る
物の評議之内中なれ共是ハ専の事なり右の屏風を待ちし
へし書かし移徙の期日も極りぬれハぬまあしんと評議
さしに留守居来たり彼諸侯へ使者の送り物よろし
幾日迄に送り給ふへしやと談しけるにあきれ果とて彼

諸侯の家にても大に悦ひけるに稲葉家にても其日に至
て申や来ると待ぬるに日も暮ぬ迄使者来らされハ
ぬる通達しやと云人も気遣ひ掛合の家来ハ誠に絶
体絶命の心地しけるに稲葉家も使者を以て大屏風を
送りけるに厚く礼謝なし使者の働きを称して
其に使者を仕立大屏風を大器家へ送りけるとなり
後るゝ事ハ人も屏風の採択仕立ちを家来にて待きるに
あまりに急あるにてけるに其結構を大器家の扶助に
も移徙の其の品にハ物や上下一同も感悦
の猶かけるに餝り付け気をひさるに大器家へ其人

以て自ミまて承合細工人なとを以て始て支度なしき
るところや今く済切の事相なしれ廉忽の所斗よハ移る
事なる相なきハ公何よ言ふ記也

米良山奥人民の事

日向国椎葉山の奥ニ米良なといつる所ハ中古ハ村
里を成して人民なる事を志アし由清貢請役元〆を
務めつる中村右衛門といへる老翁の語り伝ふるハ椎葉山
の材木伐出しニ付御用なて彼地へ行しに日暦のほと
に案内いくさせ深く分入しに山中に一村ありて家まも奈
程あまた陳そしよ何なきし家に米帯まへき所もな

されハ彼家に何りぬ程あるに着物ハ麻ハなく衣ときを
着て家内の様子を見ニ米田へ入し地より来さ
なきよしなきハ是て里より持来さし米を出し食する
に焚く事も鍋中なるに飯のたきやうを不知由なれハ
煮るハ何を食するにやと問ふに木の実鳥獣等を
食となす由其大に驚き召連し小者に申付て飯を
たかせ試て試りし飯を家内へあたへけれハ彼家
の老翁其様を試しにあつめ初きて給ふ者に申けるハ
此米ハ天の福なるて幼稚よて米の飯を食せる事よ我
らハ五十の歳始て米の飯をくへりと云し由実なる

鹿谷にも生れてはよく古語諺なるに太翁ハ百宝の餘
にも成田孫兵衛といへる家内ともに大勢来て振子なり彼是
の事とも出来るよし物語りぬ

矢作門にて妖物を拾ひ難義せし事

宝暦の始にや三河矢作の橋詰にて江戸表より大
勢役人職人共役として渡りしに或日人足の者門緑
に出しに橋の上に人形様の物をのせて流れ来りし子
供の戯れやせし人形の様小児の翫ひ共思ハれさりと
ハ西なき物にとて拾ひ帰り棧布にて包み置けるにあとも
なく今日かかりし事とも明日かくの事あるへし
後ハ明日出られん頼ハ明日何とへ比へし事と申中なる
まそ西なき物之是ハ浅草ぬなとの用ならて娘の福を
おもしろかりしか後にハ大よふうそきく厭ひおもひしか
拾んすれハ又怖哉所の者よ語りけれハ彼をの大よ驚き
よし形き物を拾ひたるこそ此人のより方振の事をなき
そのまゝしとやしろに是ぞを拾ひ帰りてハ是さらし禍を
受るなりと云し奇もんなるなく十才よくはきてめす
してつむやと愁ひ歎きけれハ其人の中なるハ是ぞを
拾ひし此の通板の上にのせて川より流りし子供の形を
まるめく彼人形を慰むるゆゑて是ぞ流る向よ捨て

いつとなく〳〵大事を流し取して跡をくらましたるを
誤りぬるハ失たりなりしと云傳ふ由語りきゝるものを
大に悦ひ先迹ちかくして救し持しとなんや

秋葉山應火の事

駿遠州へ参りけることの語りけるハ天狗の拾ひ火
とて遠州の山よりハ奥に入らへハ皆燃て拾り為きる
ありて為しに参りける時ハ川へ下りて手ちを拾りなと
ありしを土地の者ハて狗れ門前に出てるとて其の事
怪みて戸なしを建ける事なる由いふなることなれとも
清用事に彼地へ参りし者予か友し遠州森の者なと

語りしと同し事也

手業手法に非されハ不調事

予か知れる者に盧南といへる隠逸ありて詩徒を勤
めしか中年にて隠居し俳諧を楽となし素より才
力ありて文章も拙からし或時傾城の浄瑠璃を
作りてんと筆を取てハ嶋大帝東海硯といへるを編
集し戯場の者に見せけるに彼者大に喜ひして取る
作ハ手業に先哀ま芸者に目論見なんと拵へしか
孫ふく和歌といへる人形操の中にて大浄瑠璃芸
者を與りしけるに見物よりて大抵をつくして大

さハ甚遠からすれとも所々へ遠し處も影繪盧毎
うかゝあしとひし處をも引證なくしてゝ知れハ彼宮
神付属さしたるを以ゆへ浄瑠璃文句なとにも多ける
まされハの事まゝへ古佛ハいかにも西ふく縁生来る
その方まて素人の作り難つる所ハ新造元を文人能
の振付方其く違ひて古佛の道よりてハ難その好る
さる處あり此故に些し語りし由何事ニも家業より
あらされハ理外の見處ホハ志まさる事と語りぬ

海上にいくしとゝ云物の事

西海南海にいくしとて時にあたりて船の尾さきに掛る
事ある由色ハうすあかきやうの物にてそのさまハ汁氣なく
尾さきなとへかゝるに二日も三日もかゝりてすこしつゝへ動き
ける由強きハ何十丈何百丈とも限りを志らすと云り
いくしなしといへる俗説ハ是より出し事なるへし或
人の語りしハ其物ハ其時海上にハたゝいくしのちん
きやう物なんと云ものあり足ハ鰻の形なる物にて眼口も
なく動くその強きハ船のへさきへ掛る事もさらと
伸ひ動くまてハ形く免く見る物やといひしいつまて
実なるや勿論船の害をなす物なれともあしさとも
海の巣をおろし危き害にあふし事

下におゐて武士とやらん又辛しとやらん召仕ふ仲間鷹の巣
をおろし候ける事有し由御とるに右仲間或日巣を探
居けりしにうしろより何者か抱しめて我か上へ落かゝる
者ありけるは大きにおそれて家の内へ逃入しに鷹一羽
下り来りて肩を掠れ柱へ三寸余突込し嘴を雛を
取らんとて彼男を突損し勢ひの余りて柱へ嘴
をたてゝ引抜んとすれとも叶ざれは其内大勢立寄て打
殺しけるとなり彼男命助かりし迹を恐れて彼をしるに
かりなたしと手を探ひておそれましとそ也

鳥類も生物命を惜る事

有徳院様御代鷹を獣に合せ給ふ事有しに鷹は
獣合を考ふして咸云へしと古人の語りぬ房居に
てありしや飛鳥山にて有しや狐一足追出しけるに鷹を
合せへしと上意にて有けれハ鷹を合ふに鷹掠ることを
難來架にのきて彼狐に合せけるに狐をつゝくさる事
にて喜勢ひなく狐の形つくさる程遠に逃延しに
たゝんとまきは今も成ることなく思ひ居る通の様も
誠に急くしに突き狐つくさると思へは鷹翼を始
めつらく虚空へ飛上りしか暫して急に打ちかゝし
其所も隔りけるにて右の狐を押へ取りけると勢ひ

の餘る處あり今此くさきを知らく頭ふくし鳥獣の智
恵も怖しきあるくと噺しぬ
　行脚の者其人此許へ訪ひし年
前に記しぬる虚無僧行脚して上方筋より美濃信濃
のあたりまてまかる强気の比に住へひ情中より矢立
取出して短冊に一句を記し居たりし海道へ年比
四十斗まて大結の布子をきて山刀を帯し頭巾を冠
りる男立留りて虚無僧に申けるは此方は誹諧なし給ふ
とみへたり今宵は我ホり行脚の法師いくたりも来りて是より
程へてと誘引しけれは嬉敷思ひて彼者に連立て其法

三里斗も山の奥へ伴ひ行しに一つの家あり彼男へ伴
ひしに妻子ありて家居も見苦しからす強弓を飾り
に人家もなし謙に山中の一つ家也誹諧の友とて寄
り集飯なと振廻手も交ぬまゝ八つ下り頃に帰へ伴ひける
いかなる者や狩人と思へと弓鉄砲も見へすまた夜中に成
く人の出入も多く蛇をなとしてあたり語るさま其
年の者とも見へす不思議なる者と思ひぬる内に程なく
能痛るきさりしかは前ニ夜明ぬまゝハ奈良辺へおもしろく
此身ハ何の渡世なし給ふや又いつて何村の何某
と云しに志らくとハ言ひつゝも斯きりしを老つまハ盗

織までも見しや舞台松をつんき讀出なとも来り遊つり
出来る又振出けれは拍き人々見つゝ其翌日ハ山のはえを
送り案内して立ちまかりぬるにもことに寄されしと語りぬ

熊野浦鯨突の事

紀州熊野浦ハ鯨の名産にて鯨おひたゝしく取る事
多かりける也　有徳院様いまた紀州にまし〳〵ける御在国
の折からにやある時御覧ありてと仰出されける或日御在国の
時より鯨突ある鯨突御覧ありて様を浦方より申上けれ
まつは御様なりて則浦方へ命ある人々数百艘の舟より
幟をたて進みける沖へ漕出し一のみちに見えわたりと

ことりを數千本なりけるく麾を揚けるにて鯨をと突留
きとりと法をもかの方も思ひしけるに程なく取くして
其頭をとり咽をさらにひく大綱を以鯨を引寄せける
其そ何まても立寄つ人ましハ鯨にハあらずして古ゑ取にて是
しき附浦の老翁か出申けるハ鯨のよりけるを見とて
御感を申上てハ其御今一時を争ふ様にて速もに振
を御覧の折にハ新来仕之御感ける鯨の突方を学
ひ御覧に入れなり誠の鯨にても遠ひけれハ立てく由
申上けれハ甚御機嫌よろしく御褒美下されしよし
大村長ハ我見の志なりと紀州出生の老人語りぬ

任侠人ゟ所不敬の事

糀町ニ住居いたせる所の親分と呼べるものゝ事を
五十余年まへさき比男なるか糀町十二丁ハ勿論芝麻布
青山迄の男達と呼るものハ皆侠男を慕ひ集ひける
猶るに神田下町のものハ山の手組とて糀町四谷をハかや
しめ刑様の仲間なりし或年山王祭礼の附祭りの
屋臺餝りもの等をものなしても餝りをさせ侠方
者ともいひならしを彼是まゝの如く左すれハ喧嘩をなさんと
手の事なし我先に侠方へとして手分れの当日町
の木戸に出て下町の手組渡りかゝりし附餝りを評の

趣所望なり学ひてさ頼へと所望しけれハ例の通り
年某の挨拶なる者我等ハ中生ものハ是非不叶と
左なくてハ此まゝ通し難しと云けれハ下町のものも其
人のいゝさる事なりて下の者一人留めなして
とて通しぬ評やつと申けれハ猶る上ハ侠方なしと木戸
出を通りて我を車よりけて曳数し通るへしと此
の者中に作向に押より色し引違へんとしけれ者共
寄て取まきて皆下町組よりもおしなしきゝのまゝの出
て其仁の如く餝りをなしとて通りて先を離し
通りゆくとて所を出さきなりけれハ侠方のものん

かゝる奇特も又抽て誉り給ひぬ

信心に依て危難を免し女の事

予か許へ来る信者語りけるハ館林に信心ふかく
仏神に帰依せんハ只口にのミ唱へし事ならし一途に実
信ある事にハ奇特も又抽る事信の志まさることは是に
法華を読誦し或ハ書写なしけるに辰年の大火に
浅草に住ゐて嫁める女清水寺の観音を遁しに
家居を火にて焼まれきたき如何にもかく新堀といへる
川の端に立しか煙俄かに香まき熱く苦しかりけるに
一人の僧来りて女の袖中に入て免れしとて

佛像を取返して厨子計なるを女へ懐中より握り飯
なと出し与へけるなり示しとて彼厨子の中へ入て
煙を凌ぎ右飯にて飢をも助りけり火も焼留り
しかハ大厨子を出して志ある人の許へ立返しけるより
ける一念に信仏ある女にハ奇特も又抽之と語りぬ

狐附奇異を語りし事

元本所に住居せし人の語りけるハ本所割下水に住
居せし女風も吹ざるに蝋の絵ましを見て嗚呼何の
哀れ小児病死せんなといひ或ハ木の枝折るゝを見ても
てハ何某の家にハ何事なら又誰の傷をうたんとてハあの

主人かゝる事なりと云しに果して違ハさりしかハ如何
なる事やと問しに彼が答へて歎ることもなり神道
修行する者の仏神にて吉凶を授けたまひて知るゝを
知る事なきを俗眼にハ是を志れる事ありと
いひしと語りける由

大人の食味に好る所の事

松平康福ぬしハ菓子を食しけるに或人語りけるハ
康福ぬしハ他家の菓子ハ用ひ給ハて菓子所にて仕
立させるハ其の好に叶ふ由語りける或家来を新にて
是しけるとも世又葛重吉和家の蛤を好みて持られける
に阿る諸侯へ出入を嘗めて招請の折から和家の蛤を
答意にて出しける汁殊て濃て勝りの汐汁もあかり
き答意出たる料理人より和家の諸方へ大なる
ハ蛤汁好の由にて主人是を用ひ中付しきし答意を
多くもちてまさるハ如何成る事やと問ききしハ
彼諸方等へ主人諸料ハ伝三寸大に異なりと
いひし主に此人に語りけれハ又泉州を招きく汁
家ハ和家の料理人を新しく料理なきしに彼料理人
来りて蛤数十個の内三四個を撰みて大蛤の生中
を二タ切狩切て跡をハ捨くり然るに和家の二つを

含味して採剤の風味は純然なれバ飽まで賞美ありし
とや大家の御中自然とかくも召抱られし何事も
聞え侍りしとなり

菓子所に通ひし生菓子ともなる事

有徳院様御代何某のか国家の家法北菓子を伝受
及ミて 此菓子の義御門をはなれぬ文ハ隣へも伝来菓子の由なりとの由嘆くるれと何を秘するも伝りぬ法前免を
なれハ則自身附来て製作ありて献しなりまての法
称贈ありて夫々より上しと云ハ生法宮にて其外悦ひ其中
まて伝れとして毎年二夕ひ寄進すて四月法銘ゆえ為来
新製とと申されしなる国家なりてハ中新製となる紫

ありき

阿部川餅の事

駿府中阿部川餅とて名物の餅を
献じ此まゐる事なりこの餅よくあつきを
有徳院様にハ度々御好ありも御献上りにも来て
要用にて御在方阿部川餅やうのことどもハ通達になし
との上意ありしにより法阿部川餅を御めし古記
駿東ハ生完文七とて駿府の者にて代々をつ
とめしか大阿部川ともハ富士門の流を書付て紋
し富士の雲をも用ひ候ととし其印なりきハ印とハ

不明なり文武の代より駿府に拝地ありて古餅米を
作り以て府県の仕置ありとて則駿府よりこの米
拝儀とやしきをとらせ玉ひ献上して餅となして献じける
に付の御法様見えしは今に至子孫より古留守
の餅米十俵つゝ年々献上する事也古孫左衛門ハ其後
将く召さしても新田十ヶ所一を与へ下し置し西丸御
留守居と称め九千斗まで相成ありし所々知行まで賜

安倍家踊の事

安倍家にて正月に家の踊りといふ事あり
御先代御覧ありての事也今に古例にて勤む古の踊
を覚へ給ふ事なる由予同僚なりし江坂栄安倍に
古き事りの起あり抄なりける事なりしと語りきかれる
とて古風なる抄にて古き書も見えし礼節になるに
例なるく礼楽とも遠ひ諸ひ抄とも事替り多く数を
あいしらふ事のよし年寄の武士の内なるは中付其儀
を抱しけるか高野の風と遠ひよろつ古風雅
事有るは皆いとひ嫌ふしといへとも家の踊なる故へ古き
楽をも踏しそのまゝにける由古雅なる事にてさうしと語ぬ

天職自然の事

天子の御位ハいともかしこき御事中々足らく仰せの

御代にやありし御名代上京にて　天顔を拝し奉り且
頂戴の事ありしに右　御名代冥東御府の上使司の拝
言上済て於中上りけるハ尚後京都の御名代にハ清濱
代の内よくく其人を御撰しに　仰付て然く其都にハ
天盃頂戴の折から賤き人にあらぬ非威の有らへき
いきん方なし若亦拝盛ハ不義の危いさくらとおんとの
禁裏より　仰付に節あらハ違背なく随ひ奉る事
あらんと定西とも申上られハ　上にも左に思召けると
なり右ハ板倉周防守殿松平讃岐守とも定へしらむと
定へされたる事に記し置ぬ

大坂殿守廻縁の金書院拾言の事

享保の始つかや大坂殿守雷火にて焼し事ある年出
火災稀なる地なれ上下驚動大方ならす江戸表へ伺を
状出来して御城代御城番書院並番頭各衆初(?)押調へらるる
けるに大書院鋪かりし宝庫某いふ者も宅押読め者方
丁寧にて言悟く掛りし在御城代も返座やあらん
と侍の同役御城番なと随ふ同意ありて御宮にて御
其の事も及ずし急変の事なれハいときし御下知をへしと
云けれハ彼人答へて四泳(?)の沙汰一刻半刻生かりし
とて害すれハかかる世の中利害かゝ雨中に廉末

あるハ寺院住持稱唄ふることの外に江戸表にて流氣
きびしきと思ひしに御ふれ合も静にて調下されしとく
右の事と人皆感しぬ

悪党其の手段も一工風ある事

信州飯山家内の水野として此和の頃より江戸表に
来て携へ世羅の宿老をときける事ここに国大坂表に
清といつるもしらえ末大坂表にてたく博しく甲斐を
立ける處一旦ハ水野の新屋敷にて生しける彼者信州御門
所一向宗の寺院へまいりて我等か代々一向宗なるを承
諸所来の寺前住の寺院ハ其の宗にて上の住持を

いへし方なされと以前の菩提先祖の寺ひもハ法清事
来て寿相なる中に右歎きされハ右の事とて他の者なく
あいしとひしに此付名もも御ふお忘にあらしく
よろしく段々にすましされハ彼和尚の所縁此所家なく
その修理なし宗旨済切の仏より彼旦家中よりの所家
にても他方なくしけるに大きるにても又中よりの所宗
の代の親ひもを折からハ寺く相相なと離しける中へ
深き物に思ひける式年の菩提何か入用此中にて銭五
十両借用いたし度旨に付候也しけるに日限にいたり
られして返済なしける事一両度となされハ直に来

うまきいなしとて今ほどえ新に作る言も出来めとては
あまりに調へ渡し作るに一両年に積て何百貫文にも
かゝり作る上にほとは積て返さずして不足也とは兄ひ作れた
まつより来て弐の方に渡して又もなく候きて作る在新
出る事もなくはえ金をたてへるはしとなし元来の無
益事には生まれても成るべき事也と仕別ちたる物の折うら
人の嗜しつゝるをやめぬ

金銀二論の事

或人の云く金銀の世に通用するいとめでたき事なりとて
大金銀の出来るを考ふれは数千丈の地中を穿ちて辛
苦して取出し或は吹き分けし或は溶かしてはつけ又吹き立て吹
分て清くして箔金灰吹銀といへる物になりたるを引吹
立て小判丁銀といふ物となしぬ元和より出来上りまて
其間の人のつくす力は費いくはくそや殊さら此方或は
吉凶共に今をきはむも容易ならぬ事にあらすやといふ
なる事也又或人の云く金銀の出来ることは其人費多く
して通用なす物には斯る宝をなしも徒へ重
つき損なし徒らに費して世に通用させんしてそよなる
といひし是も又なにゝ何事を是として何事を非とする
世の俗金銀の貴き事のみを知りたやすく出来さる

事のゆゑを思ひて世中の肝要なる身の事をもつくり
あまて一金一銭を惜く家族従者まで難義させぬ思
金銀を貯へ衣食住も人に劣りて暮しかりんハ是
皆銭の賊といふべき也さらはあまりに私の為にて金を
ふりみまて酒食にきそひ捨んハ是国家の冥罰をも
蒙りなん世中に武器をも売て家禄に甚し外科を
売て酒の価とし農具を質入して貸銭をなまて士
農商の類も鈍こうくほろふへきなりと爰に記

風土氣性ニ一概に難極事

一年新見加賀守長崎奉行の時長崎市中二ヶ所一焼
失の事なしにも長崎奉行ての大火なく役所よりも手当
なしかも長崎の地役ハ諸侍といふ事をゆるし候作なし々
るゝ漢表へ茶二三俵程積て出ぶなかりて貧民に救ひ
とかは振建札設し重或ハ家の元銀を借して浪人にあたり
を役所へ差出させしるなし由も長崎ニ同年中寄合せし
その一諸ゟなし也長崎湯交易なしにて利にあるち地と
思ひしに唯嘩をせでハあなからる様しむへき所にも
おそいれさる故ニ爰に記し置ぬ

人の様に立る事なまていうさる事

大坂町奉行石谷淡路守の事に大成る石とも大石に立寄

少しにても穢しぬまハ家業なとて昔より禪を修して
人の主たる事を戒めぬ者なく對する所なりの節かくる
時者は近て死とて或條に定りしと彼是諚る事
なくて行ふとしに寄る所なかりしまて修役を近しよし左
對るものハ生質指図しうを者のたりなくも神明の
器も為るべき人なりと數て古来より人の禁ありしめ
る事を破り捨んハ理に似ぬくまくに理なる道し
といへき事なりと人のいひし

主従可情事

武蔵房の奥方京都堂上の息女にて大奥方に附添
来りし京侍に候右武蔵房に勤仕して後ハ表方へ出勤あ
りけるか或る日の出陣に供奉して敵陣の折から武士ハ関東北
国々の生まれなれハ用に立ち昔語にも京家の侍ハ戦
場にても逃去勇氣甲斐なしとて敵笑しを彼京侍
聞て京家の武士なりとて現在貴なるへし何そ京家
のなまりとて後の嘲成へきやと申けるにいひけるや彼
是一つ二つ取合ても京家の侍の意をみんよとて果ハ敵
備に及ひ雙方共に差違に命を果しぬ

戯事にても可慎事

常う志まろ人に器量深き人といへる人ありしか彼家縁

の末清水法師の小十人とまうしける法しあつけるが或夜酒もり
此折ふし坊主衆の戯を向ひて詩を作し妖怪の学ひ
して大の声を威しけるに従ひさる男はやまされん常級
を抜放し彼坊主をあやめけるを大声に驚き大勢
馳来りけるに坊主も詮方なくて死もやらざりしが吟
味の上双方共に法師を許りて浪人なしぬ坊主は勿
論きらすして切しおのこともはかなしくなつらんと人々申ぬ

附節にて物無的中なき事

牧野大隅守法勤定まりの折から甲斐都留郡忍草村
と同郡山中村と富士の裾野入会野の論ありしを予
掛役の節吟味なしけるに先年の裁許墨筋の通
手前違なく猶又境を立裁許なしつゝ猶山中村のもの
共裁許にてハ難立由遠なしける由申立下訴なし
けれハ焼捨にせんけるに松平右京大夫殿其中の折から
かゝる訴なしける者にて扨ハ大隅守へ下りける依之当人
予ゝ思ひにて大かた訴人を呼出し吟味なしけるに山
中高大つといへる百姓にて我ハ訴へし一人なくして
難じ事を押返しく申渡く一年余も附く呼出て
利害申含めましく申渡のりけるしぬ事にて我が
を張ぬる者子細ありてあらめし風聞をきゝれ者を彼村へ

きゝ訖りけれハ笑ひとの立帰りて申けるハ裁許の通り
ニて何のお違ひもなしと近所の村ニても申ぬとく要
細吟味の節ニ引合風聞有りける話出付ニて罷出しぬ
それらく詮方無く雑談なしけるハ甲州より鯨笛参りハ是く
我独注く大坂の何ともまちかまへして山中の猪利ニ奈
走へしニて江戸表へ出ける其方の新田ハ月々村々小前
より二銭三銭つゝ取集て何程勘定相成り候得ひ申へき
ようになり申合ぬる由相又大悪代ニ出し其方ハいつまても
大村ニて命を不知我意の支配を取立重ぬるハ大悪代
の頭立たる者ハ多く強欲の者なるハ罪ハ甚たしニ

帰りてまちく悦ひきぬなり裁許済く直ちに帰村の
其日公事ニ負て帰りし龍やめてぬ何哉しこの通りならや
まけて帰りて両名を合さるへきや早く江戸表へ立帰り
願へとて我家へ不入押出しけるといふ事を聞しぬ
段吟味の折から風と始牢に追出されて江戸へ出し
とにかる事を喜ひつへ申出けれハ太風聞的中さしや
又ハ太ハなけれとぬ牢ニ追出されしと云しを恥て怒り
しや以の外両名を立へ江戸表ハ夫より甲州ニまたを
追出出てもなく追出されれハ男なきゆうなし
両名ともへ申けるなれ中ハ風聞ニて吟味し

なまハ偽なるへしさりとて申なりとても訴る非れ乃さ
つき起なるしさりしまゝに付被下る此度の訴ひもよくよく
考へし下に付つき出府に近出されしとりつ年を以て慎
るへなるハ一旦下りて不残筋を以詮議し大裁許下
の公に不叶逆邪之訴に我ことを申誡めまハとて
公儀にて法を上つるふ吏ぬ上下のれハさりなるる私
をい　公儀を清くの公なり難しと申出るゝに甚年我
こゝをまかせし彼甚た乃つきも聴く無てまてまとしろ吟
味の議得なさし由らて決よて下形をなし裁許に
清しきる事の親なくきし在る清しさる事ハまへく

うまを付て落着なしたるに何程我浮きしさりとても
其病根に的中なしぬまハ了速落着なしぬ事に悟
のるふ為苗の策のこ施しなると思ひ清きぬ
　藤能堪能の人なを威勢ありし年
訴山宗ハ樂家の子にて觱篥（ヒチリキ）の堪能なりしらこなり
放蕩にて中年の比至て家迫なり或日吉京町にまり
てかくらひしめの訴尾にて觱篥を吹まさしりけるに
出家を傷て留守の出まさくたちアまりを好みし家に
若しかくまてハ知人なよなかんと好みる成訴て通しける
よそにも出家へ至りて好きに何きにも能を施しけれハ

甚感心ありて酒なとを催しに及ひけり我身ハ菊池内安
家の藩中何某之子孫なりしとて聖教をきはめぬ
経太の事をむかしよりしてくはしけるハ深窮辺に及ひ
し有風と思ひ出て内安家の屋敷に至り彼篤家乃
名なるを尋ねけれハ太の家まて何月より来り給ふと云し
ゆへさらく此訳にて来れる何某と中老の由答へける
にあるし對面なしけるかいつそや京都にてあひし人
にてなき有大に驚きけれハ互に語りそあまりて皆く
請きたりて案内なしてつつきなる客殿に伴ひ習して
出し人ハ彼土様にて立ちあり却を好みし人之能そ

なり給へる後く来りて当坊術を施し給へとて医業を
好く学て老く帰そのをとし上仕官の命ありしハ小身なれ
とも屋敷に仕へよとの事なりしか振出にのこぬかりし
我身抱の用に不足とて辞しけるか此く呼出して扶持
なとを給わり書子をを呼出して今年以来とて御仕を
ゆく留家とぞし人ハ滿池に株なき故度なりしとぞ
今の子孫まハ何某とも名をもしぬ

壱岐奇談の事

岩井某といへる武士なりしかおかしき人にてありし或時
語く思ひけるハ我未見ぬ時よりありける事なし

てこそ世の中にて為さゝる事なかれと意の侭より人
と朋友の交りなくして家前に生れし事なしいらさる物
やと思ひけれと生得醜き上に志衰なりしゆゑハぬ御生
形質二百年の学侶なりきさ訳を形ちてもなほへき
といふ其のつまりしと風と思ひ付くそりかくしいつる
物を求めて春の日稼ぎに堪兼して我身とゝ生業を
なし給ふに志衰の是弱くして病を実なるに紅の中
へ打入て実正をつとめて気絶なしけれハこゝにて尽る
おこりき子供姥なと欠集りてやうやうに気絶なしく
度を温くりて生根帰しけれハ医師に業なしとさるへき

なりける赤き紐の履を温くりし紐よそくし衣被をと
きらしぬるハ右の好まなお驚きて引出し其孫より
拿死付しらかる詳とも詳しまちもさ得やうん事もなに何
と何きも驚きし内に笑ひを含くなると也

橘氏物学の事

橘宗仙院ハ物頼の直人なり或時隅田門　隣家の
弟治村昌の内夫を清小人の頭なる歩をつくく
いまくハ子をとらくる隅田門今ハ小人ら内夫をとらぬる
南主御妙のまなりと人のこりりぬ

類女家素の事

紀州南龍院殿或日和歌山ニて御物語へござる内ニ御家来を
御覧なされ候て御公儀の指子もちかく候御家中のものも大勢
御家来なき候に或御家中ニ侍屋敷なと持候家之ニて通り
しかと御側ニ居候ものあまたハ誰か御なし男なりと尋
ひなされ御申上来いふなる御前なしと御意の時御側
のもの共申上けるハ御家中ニ而御前屋敷中上きるふハ
誰ぞの子上ふ様子のよし申さハあまりと存候方もござ
之候者ふ衆の義ニござ候と申上けるニ何ぞ申候や
と御尋なされハ右の通ニ侍ハ誰が次男ニ候某
殿又誰様家様何もも三男四男或ハ揃り居候男
なとこて候と申上けれハ南龍院殿御意ニハ夫ハ于今
家来之分ハ大勢召連ぬきと誰ぞ所来ニ労くる
筈り所誰様の所ニ而も不ぬきハ是非もなし
とて何れも誰ぞを抱なく候もとて事多ニ而
候を仰付なしと也

盲人吉兵衛或通候事

有徳院様御代ニ紀州ニ誰か入候節御座の御物
入ニ御座遊しを御物見下ニ平日御療治ホさし上
ル坐頭来通りけるか強く耳を傾け御物見下ニ
付ニ居て我ハ数ニ出中候ハ何ぞと御尋申ニて

これはいとあしく自出度事なりと申けるにこそ何
ゆへかくハ申そと問けるに答ハ物ハ下を通りには
衆は屋形内にて饂橋はきゝてハいふても悦ハしき物
なれ何ぞ不悦の事あらんや此ハ悦ひを好むなり
申さんなりと申けるにぞ　上にも悦ひましましける旅
なく御本丸へ入る将軍に至る為出けるは旅盲人
ハ其後板鼻検校といひて悦ばしけるとぞ也

　苦兆なしとも称申事

去所不京に設楽家といへる人仕の女情好して三
子を生しけるを則名を文義孝義忠義と名付て常

ハなや何れも其弟に申女中の設楽の孫なる不忠者皆
てなるハ物にハ自然と感ずる所能もなかりしや右設楽
始め悦小人親を悦とめて　御妹涼雪の言三子を設け
しる名を何と付つきや文孝忠信といひて数り三字へ
語り出る善く文義孝義大義と付へしと思ひて名を
なりおこしも母免をへてしと思ひしが果して三子を設け
て之を通り付しとぞ也

　未熟の射藝に猟の落し事

弓を親しき弓術の師なる人の語りけるハ或出入の脇
きたるに悴を弓の来りてけるに猟付て其弟の由

蟇目といふる事なしてはなりたへと覚えきけるなへ
其形をなしに実にも狐の付くるなとなつて識言は
いひくかし漸しくみくさりけるを蟇目は潔斎の異
ちよみて急には術難し志らし工風の事なるなきは重て
昭りけ狐が付て則彼狐付を巻葉の蓋へ移り付く
子供にか付てさし矢を凡十本射さきけるに悟くは
叫ひのきりしる後は静に臥て引けるに果して狐き
落にけりるなす子孫蟇目の法て分にありけ未究所
も不極未熟なる者風として以言葉をもてつまるす
家になきに事なきは狐を生危きをさり思慮し矢の事

なきは謙にあひしのかとりもなく浮き矢言怨しけれ
は落れもむへなりと譏りぬおかしき事なそなし

孝養自然に禍を免れし事

ある所の事なる由雷を嫌ふ民ありしか農耕作に出て
留守には妻と七歳の男子居たりしか夕立頻に
降来て雷鳴騒しかりしに彼小児急て親の雷
を怖れ給ふ事なきは獨畑に出らさて恐ろしく
思ひ給ふらめ兵当も拾りつゝ迎支度して出けるを母
親とゝめけれとも聞ずして出けり彼百姓は木陰に雨
を凌き居たりしに悴の来りけれは大きに驚きて合

物を食ぬに肉食もなくして日も暮なんとせしか
とく帰りたまへとやかれハ小児ハよく仕置給へとて先へ
帰りけるか一疋の猿出て彼小児の跡に付て野辺を
送りけるか親ハ大に驚き果して猿の為に害せられ
せしと身をもたへ心も心なくさせしに又此頃ひの雷一
なりひくや否や我子の主りしと思ふ迄へ落にのせ
しか農具を捨てかけしゆくに至り見れハ我子ハ何方
なく猿ハ微塵に打殺されてありし実て我子も死し
ける事なりんといそき家へ帰りて見るに彼小児ハ安
穏にてありしと也

雷公ハ一所に落ぬ物と云事

巣鴨に大久保某といへる人ありしか享保の頃諸鞘の勢
子より目付の許へ帰りに急雨にいとアを兎しか来
迄も拾ひ折りし雨も降しぬれハとてそ人も皆安なる
か雷公も又ハ母の妨ひ彼是早く帰りたしとて一所に落
のり諸鞘笠に合羽なとかへて帰りけるか稲荷の辺より
ハ日もくれて白雨しきりにはけしく雷鳴も強しけれ
ハ一さんに走り切て帰りけるに朝比奈の町家いつれも
戸を建居けるに一声大音雷の落ける所とおほしき
てとある町家の戸を蹴破りて床の上へ落けるを上へ

る立止りけるにそ又引出して棄切我家に帰りぬ中
つきハ跡にて積られ其まゝ帰りける由我らに求め
さる事にハあらす村の町家の戸を破り捨きし事を
京の毒なきハりて板子をつみ来るへしと家来をさし
きけるに彼家来帰りて大に笑ひ申けるハ此夜の雷鳴
近片町の辺へ落し由に付則来り承るに何所ぬ
何商売致しんる方へ落し由申ける故何所といふ
ある板子なりしやと尋けれハ此家にも見へし其
雷の落し所ハ戸も蹴破て見し世に雷ハ連鼓を
負ひ鬼の姿と申習りし絵にも書木像にも彫刻り

ぬまことしなる様なりし是ハ全く仏説にて其形も傍
怖ろしきといふされハ彼家の従来落るき方の虚談来
へし猶のあらさり此夜ハ雷公ハ一ツに棄て陣笠板
の類をとらふつり抜ふて落始りて戸を引返しそこに落し
て累りあひしか上てに随ひ隠く是く雲へ移なく
おきかすりあひしと語りし由申けれハ友あるハ雷乃
業と思ふへきなる人して いちんハ却て不興なりとて
済しけるとや也

精公にて出世をなさし事

久留米公の家中於家に何某とて手跡のよき人ありし

か左の者噺しける由同家中に清書を勤けるその男
極て小さく見めき生れ付なる俳清書故にハ石仕ハ手も能
のなる事なりとうつくしと言しけるか亦して世をも渡
らんと学念なりとて或日妻に向ひ常々の稀にて
ハ生涯世に出んこと難し是よりして是非手跡の稽
古して何とそ一度ハ人並に世渡りもなしくしまに付
妻子を置てハ我勤も出来難し三年の間里へ帰りやる
恥をもいとはし三年の間ハ学ひつめに集ることを思ひ立
くたりぬる中にけるに女房も是非なけるや其の由にて
立かへ里へ帰りけるに彼清書ハ其夜より昼夜明暮

手習を怠らし朝夕一日つゝ怠て是も後用の外ハ手習
のことにかゝり彼祐筆の手跡を習ひけるに三年ほとなく
師匠にまさる程の手跡よりハ大なるに増り則祐筆に
出て帰く出世しける精出なる事なる事これハ其志し迄
をも遂ることのなり
年ぬけても其業成就せぬと云ふ事なき事
予か志すまる国代家ハ高三百石にて壮年より弓馬を
出情して諸射常礼を修りして西清書大清書の中へ
清書入をも許ひしに彼家ハ宝永の比桐の間清席下の
数ふて元来精兵より出し家なれハ清書の通りも

なくて色々なしけるに法名へハ朱雀しといへる
事ありしハ年比けるにぞ太不思議き話らハ法林寺木の法
役出をなさんと思ひけるに講に無手同根の無縁なれ
まハけ取ひも不付とも欲しけるがあくまで無実なき人
にてなし在年三千余里にをかりしが一身一槃を
生して断アにも習をなしけるが三年目に頭の痛り
法太第に出らくまより今ハ寄の頭といふにみるに悟
役なしけるとや

蛇をとばしし毛抜の事

下野州日光まり法とめけ折から噺しけるは
同人日光在番の中同所にて市と云ふにて毛抜の掃揃
あまりに詳しも調つんといふその名しを得るに元来
御祈願の因果にてその事までなしや富貴なる家に
彼毛抜を所持しけるが大今市の古物見上見しにつきと
何卒富貴になさん事を祈りて太毛抜を買請しより
まより日増に富貴なるに来てさまざま福の家なるよし
語るにけ毛抜をれりんといふ許ならず新しとてこれ見
こを記しけるに太毛抜の間に二尺斗の蛇を綱垂挙
なり或ハ目附の草をのまに二度の食事を与へつゝ見て
新義なるハ二三ヶ月に一度つゝきこしなるにて太毛抜

の内よりのゝ布をハ蛇の抜ケ身を拭ひぬきて掃除し
てきたる事のよし此事を厭ひてハ不出来人々しも讃
さしといふ由也偏に是を求る人よりハ右業をもなす
へられと彼御神体の事しやうんの人ニ譲りしも或年
其妻嫉妬して出奔しけるニ蛇を持出しけるより
おそれて今ニゆつりしと巻説ニ申けるか実なるや
其後ハ志らぬと語りぬ

御天像を見まはさる事

有徳院様御代法古切の物とて名高ニ入て法席ニ成し
物あり古き焼の火珠ニて見し由記ありて以まる

文昭院様と申せし頃法要日の法会縁のよし

其職の上手名前格不成る事

小笠原平兵衛小笠原縫殿助ハ騎射歩射の礼家なり
今此平兵衛祖父ハ老功の人にてありしか
有徳院様御代　惇信院様御婚姻の御用ニ付
急ニ此法を申方と成く申合ありしか御輿迎の法用
承り称ハ法来中家来の礼もなく能く学ひ扨て其
式法を無へ称らされとも小笠原ニ對読なして其式を
お読ミなるニ平兵衛中なるハぬ何の名得ニ経ぬや思ひ
の法式を承らんと申なるまて加様く読さんとまね

し由中されけれハ玉粒を通して當家の式法に卵
ある遠慮法生けるを通して殊に中々なしや侍り
皆兵し人法忘中公河の通して神武ある遠慮てなぶ
とあるへ哀けれハ覚つくいえるハされハとに當流に
遠ひし事もなる事まと聞て諱ハ其紀式に隣るて写
遠ひなく事あるふ游んてそれのまむへき処なま
忘中の法衣御用を　仰付公志を営し其家古に学ひ
孤ひしをまハ遠つり是ハ外振るくしといへくし其旅ふ
隣るて速ひを生し自然常る事ありなんかの学ひ
是へ孤ひしを其通りなるとも誉称し必まハ其学ぶ

是へ秘ひし事なるにも伸まて取斗朝夜なきお給
語りし由識に其職の上を合へともいふ尾しと此法
なりしとや　吉陽の事に付宗法の事
松東皇列吟味致より其初にあるんとをきし家の年
に法なる稲荷へ松侍まして七種にてく松侍を崩し
ち従のあひに何をを枝を所々松杭の跡に挿垂けれ
に面家の古まりに葉横けるや古松自然と根をを生
をしとて社の前に祝ひしてあり吊も法か増編りて
法組留を　仰付られ春葉の内より面の涅稲葉生し

出しを児女子悦ひて足を持重して積出るゝ並て集
ぬかゝるすも自然と此頃ま今々く親ひ悦ふ事とは
なりぬ然ともこのる事ふ流く伝し逆ひなハ怨発
起の事し此ハ歎き悲しむへし婦女子まてもよく謹
して異教ことて忘かく悦ふ事なからんことを希ふへ
し志ゝるあまくよ知るすることゝ人の親ひと悦ちんを
かき破るハ不祥の一つと知るへし慎むへき也

長崎諏訪明神の事

大ハ長崎始の江耶蘇宗門制禁被事に付建立也
よし其も元和の比なりしや長崎ハもとかくも耶蘇め

宗門にて皈依して居て制禁されとも用ひさりし宗
或残りしやらん又ハ神職ともか存意を申出て諏訪
明神を勧請なしして国俗を清き事を導かんと願ひし
なるも願ひに仍き治の用をも以清まる事なれと仍て耶
蘇信仰の崇者諏訪の社頭へ参る者なかりしに附乃
まり市中へ大なる穴を掘て崇敬を清く火を放て
長崎中耶蘇信仰のものハ残らず焼殺すへしとて
吟味ありける故始て死を恐れ改宗して諏訪明神乃
氏子と成し由依之大諏訪明神ハ三度祭礼の節も
まり今以出席なし祭礼の節江戸表へも注進をなす

諸士家中みな門徒なる由人の語りけるとぞ

一向宗信者の事

一向宗ハ僧俗男女に限らず其宗旨を信仰する事甚し
予か志つまる小倉諸士殿役を請しめたる泉本左助と
いへる武人ありしか一向宗なりけれハ殊さら信仰の人にて有
ある時ありし彼武人なりしかるに或年東本願寺の
跡江戸表へ下りし附菩提寺よりも御門跡下向あれ
ば御目見以上の諸方ハあの方にてもおろそかに致も
なりしが其寺主ハ来請有りて御由中にて候麻上下
を着しかく紋有搦を掛く本願寺へ来りけるに難

弥の御志ニて門跡對面ありて熨斗を手自附与なし
ける故中語て其席を立帰りしに次の間より其実
席百々お語合て両家の者左助に向ひ頂戴の熨
斗あらハ頂りし拝中ける者あまた集まりて切
切に相乞人に施しけるに一人の出家来りて信心のため
其熨斗を友にて分け与へ頂ゆき候ハヾとし法衣へ
乗り御拝受へ頂へとかなへしか其由寺へ頂けれハ翌日
にいたり人数二三十人も熨斗を分頂るべしと来りし
なれとも分与へけるに夥く余肉をとおり帰りしる後
檀者或ハ冥加と号し白銀又は拍拓の物をもつて礼謝

なしたる庵御法付し歌ありしハ又餘党にハ附ちまじきを
苦しきのなしと笑ひ語りぬ

門跡衣鉢の事

或賓客慧ハ一向宗にて有しか僧御坊と云ける人にて
そもなかりしか法勤堂ありの説ハ何かきこし用向老
なめとて親鸞聖人を數代にて西本願寺出府の
節何かと語にも未多年の宗風の中にて礼謝と
しるく一代の和尚を送り給ふ庵何か宗教れ七十寿なきん
と見えを引きつれしは衣鉢にて有し庵法中にてくハ
きこえて可難しと思ひなん從家にて衣鉢を傳ふ無

てそしも庸末に来てハぬ御家ち書ハ僧家にまし置て於
と思ひて本願寺門流なる僧に其事を語し之をハ
ましハ大なる事が嘗遠きなるへし於つ跡より衣鉢を附
与の事ハ出家にても容易なるに況や衣鉢をや讓
年の法則深をこそ何とそ深切に求むき御指あらん
と思ひれても今眼を以て礼謝さんハ事欲へ對し失
禮なきハ彼是と分配なし深切の送り無く下七乃
衣鉢を同宗に從者なるそれに付ふきんに百今より内
にハ中請る方なし我等にも取け給へ百年かうぬ十冬
にも付ふなしてなさ中さん引くに方なし給へと勧め

されど我等も　公儀より召つくされ仕給へハ分限ならく
なし給ふの召き者とハさらさりしかく深切の事
なるハ永く続へんとて受納さし申請りぬ

太平の世と變して勤を苦しむ誤の事

日光山法修覆に付寛三年に掛て雲山さし上法印
の名法宝蔵此事を拵えなしけり
東照宮様御陣中を召まくる法如銘あり説採出
不にハなく寄法ハ此を打曲て法蔵ハあんた様の拵く
跡多くも御軍配法にまさえにや寄の法蔵の作に
けいよりをうけてくさんきよりの法よりニつき二寸あり

又あんた様に鉄砲の玉跡二ヶ所あり
神君の大徳宇宙を洒掃なし給ひよろつ幸業若
なし給ひて危難ふ変し給ふをあまハかく太平の
世に行く絶まて今ひ残りにえて始末を前ふ乃
心情もへきるすと寛に記しぬ

梶左を清る事

日光著眼堂は夏に梶左ゑもんといへる人の墳墓を
縄修円示まてハ其調をたてぬるなり
大猷院様は小姓を法として生涯法を逸に庵認し
てなりよし絶まて無二覺の人にて法元之の名法御法

されとも辞譲して一生妻子をもたずに子孫を
のこさりしてハ其光法を伝来継しと云し由
大猷院様薨御以後ハ日光山へ御供なしして日光にて
務りけるか能算社御経献備にも法前所にお語て
いきくらしても供僧なとふ来あまハゆるさくに勝りて
御在世のかく仕へて日光にて務仕めしける
厳有院様御代堅永の法統絶たし由其の覚悟者を
名跡といへる者もなし其子来とも仕与助といへるを
日光御殿番に被　召出今に至子孫小野寺与助とて
御殿番おある事来り年児返福ハ　御先祖の法不断

就光院にて隠りさまとも讀誦并掃除ハ与助務て
板りふよしく異人きこへたまる人をもてすそれせ
　御中陰中人を殺害なさしまの事
法徳をつとめしに計其年ハ命といへる者か幼稚の
附隨ふ室し男也　有徳院様御代法中陰の事来
しまたまハ命湯為切通しを通りして福杓乃ちいそれ
向ふより来るく跡ふるえるて一束ハ命に實無りきるを
ふしくきりしける迹と路河ふ来ふ及ひけるに於て捨置
難く切殺しも御組中へ注進し所へ中之きくる
折あしく法中陰の中なまきハ取計もやつききに絵こ之

といへるものにて　上の御勢ひを見まして遠慮有之
を討留し事なきハすへて御隠くお頼るゝ先頃大中殿
中の事を申上けるに　有徳院様上意に丈夫たる
ものゝ身分不立事有或ハ意趣不致しけるあらんに
其身は命を不顧ハ常也　況や中陰の間に於てをや
と上意ありしとぞ承りぬ

武士たる平日の事にても御吟味の事

享保の比武断二合法へ論所吟味として御遠諸
役人代官并郷村役人百姓共皆く来りて大勢にて
たゝかふの手あはへ手向ひ或ハ打擲して立入ふく

の詮にて召捕りぬ依之大村并村々者江戸表へ呼
出し吟味の上にて前後御法を違ひ　仰付大法遠諸
役人も不叶不日而上にて押込に何かるに大勢の人ハ
手前刀を抜ぬやられ法役人刀を抜ふ中趣申上けれ
ハ大勢之者りふて手擲にて往て申事く神る者
有之ハとて侍の身分にて常刀をさも掛さる法ふ有
の王り申とて改易に　仰付られし也

孤猟師を欺し事

去年ずの後にて孤を狩りて其地ひを有さしられ
そしる所和の比法中ぬぞにて所持停止申し

に渡世の手なきハ彼者猫を餌居たるに一人の役人
来りて以の外怒り　公儀より法禁しの折柄かゝる
業をなせる事以の外也とて家敷叱り大になりと
をも取上たる故彼も是大に驚き是非なく僕云さし
ら仰ぎ今是きさる故湯代として銭二百文是を出し詫
つひたるに彼その深心して帰りしか猫師法なく思
ひきるハ叶迄へ来るつき役人を見それも湯代払なく
帰りし始末怪我見ひく彼是より猫不ならハ左なく
みへ罠を仕かけ其身ハ遂に移なる所に思ひて伺ひ
しに者取に至り果して猫一ッ鉤にしてく縄にて帯を

して首にかけて銭を大帯に挟みて居しをたとかうなく
やう評判のよし地役にきこしたる陸奥役の帰りて座
しける驚き大義かなの餌猫に似て候ハし猫語り笑しける
しつうさたれと皆まことを実に証し無ぬ

偽も実と思ひ実も偽と思ひてなく事

江都の繁栄ハ云もさらなり世界の舊識不思議来りて折ゝ
よ方より来りたる人と旅をかへて物語の席にて
新話に及ひたるか江戸の両国橋ハ名に斯かに穏なれて大
風吹きうたハ笑語をもるく強ふへしゆるく強ぬまへハ
大風来りても諸くしき斗く去し流く〆なきて首とりに

接くりすること不運語りけれハ京都なる者も爾の
不運氏の霊談と笑ひぬ不運ゟ云く左も思ひ給ひなハ
二三銭或ハ二六七銭の商ひを積て百ロ十百十五百ニ至
作して商ひなすまで者ありといひけるに文爾の霊談と
京都の者中にける者共ハ偽なりと侍る所ニ三井屋某
左いひとて薬茶を売鎌形屋孫兵衛とて草紙一枚
孫を売て十百十五百ぞ北為作して居ると被なといひ
けれハ孫兵衛ハ大風ニ首の接る發ニなるもありけると
笑ひて止ぬ

先格を守り給ふ法度の事

将軍家ハ宇宙を指揮してよ給ひつ法令の傳ふなる
へきよ年々東都仙台の古習ニ馬はミハ
御覧前の分ハ法同前りと唱ひ隆まして古習によ乗
ことくを法なるを好き給ふの百法同前り二三之あり
けるが皆くして法を遂へ　御先代法同前り義かを
しと上意ありける也　御先代ハ幸之つ世附よ
より三之御中もいひしけるなハ一之の内法中上
けれハ三之の内二之法変しよ本来一之法前ニ帰しと
なりかくる事ニも古きを顧み給ふ法度との古る
やう新き儀なりと諏訪辺文九郎物語なりき

酒宴も興の程なるべき事

酒えんの座敷ハ分界をわすれて飲を興じてなし給
て酒を節るを又興じてあまさず成ましく仏法なく
きるゆへ古より佐渡守又八郎白山に住居し附殺なす
なりしを諸寺集り酒宴をなしに名寶盃を傾けし
よ七合入の大盃を出させしに何れも呑まてありしつく
請けし思しけるに表作太守を勧めけり古橋太守
といへる人酒量も見けるにや七合入をあふく
と受くるまゝにほしけるを座中称歎なしけるに大
の盃にあるハ合一盃もあるへしといへるを此なしを

伊達とやおもひけん太守殺一盃を請てのミけるハ末ハ
呑とやくしつ精気を失ひし折になりけるに少しかく
して比ふて生命を傷まじを彼是介抱なし加ふるぞ
すなへ送りけるに夫より五七日煩ひけるか一旦ハ快く
出勤なしけれと積ゆく病付て大の一条病根となり
終に失けるも也因も仏法なきことを爰に記しぬ

酒に命を捨し事

佐渡守なりし附家人の語りけるハ太老人一僕なりしに飽
まて酒を嗜ミけるか何とそ生涯の思ひ出にあく迄
酒飲ミ死なんと云けるにある年々飽迄と強らへ

とて或日祝義の折から酒三四升きこしめし己の好む程
のことなりと云しに彼これ大きに悦びて大酒を独りつゞく
飲楽ミけるか三升程も呑ぬらんと思ひしようつと
なく痛て血水なと吐けるをよしなき事なれハ其の
これと思ひけるに却て死けるたま人の妻なる者
其の親友なとに密会てあの者の好める事にて死せし
といひなりしに便りなりとてさしたる知といへ
る巫女にてきゝしけるに大きに笑出て掬くかへて事に
多年好める酒あく程飲しばらく嬉しき古まんくるし
と云けるに生嬉しかりハ古年なき事を以て、けれハいふの

なきしやと語けれハ其後の事ハ我身も志らすといひ
しゆゑて大笑ひしぬ此よきまゝ巫女の口寄につきさ
ことも有しかれと好む家の酒ふおろかきてハ其ほとを志
らう情なき人多し況やふんての程みすハきとも
つきるといひしおのし知るす也

飢渇ニ臨みて一飯を乞し事

予か志れる廣瀬某ハ元来大坂の者なりし由云く
負之まて大坂よりゆりしみも読み路用を持て下
りし者神奈川の辟にて懐中の銭く一銭もなくき
ひ切しに江戸まて志まハ志らすつもあまりとれの今其後に

なりけるか風と思ひ立て其人の亭主に茶屋の前にて
倒れ居たりけれハ茶屋の亭主見付て大に驚き水なと与へ抔く
き茶をとらへ介抱しけるにそ活出し執りて厚く礼
をのへて大に衣服をとらせける其後茶屋あるし分ちて快
きよしを語りて物く存まき話よなりしかと代物払
つゝ中宿の事に其後は先より追ゝつきとヽ云しよ成る
茶屋も始めの倒れし事を恩義ましを悦りていらてた
振るつきに快よそ嬉しけれとてそ事とめへ生は此度
馳走一ヶ其人の代々にて武家の亭主となりて後ハ
御目見以上に昇進し御用にて通りの折から彼茶店

茶屋体なる家なし古への事を語り厚く礼謝なしける
に程なくる事語るよ日くは此後来も多くの事なきハ見え
つきいかうもあらされハ其の昔の事とも見るしやと大に驚き
けるとなむ

先祖伝来封筺の事

或る親友なる家年来此語りけるハ或人家に先祖より
伝へし一つの封筺あり上の包を解ずして子孫窮迫の
時可披とありてある家年多く窮窮なりしかハ
或る時先祖の遺言を破し既に是難さいまた其封
なして少計に待うんと先祖の封を尚又切解て

其内をとりくに何もなくして一通の書面あり是を披
き見れハ二代以前の祖の自筆にて認置し書
先祖子孫を恵みて危窮乃時にあたりて用ゆを弁し給
の書添にて黄金一枚箱の内に入置しを我末危急の
用ゆるにて是を遣ひて先祖の高恩に浴しぬ何卒是を
基として償ひ置んと生涯心掛しかど時至らずして子孫
是を志し給へ先祖を思ひ償ひ置べしと認し有けるに
笑ひて又金壱枚の借用を増書しなりと笑ひ
けるとぞ語りぬ

鈴か森八幡烏石の事

鈴ヶ森八幡の境内に烏石といふ石ありて碑名を
書せし烏石といへるハ元来新八まききりとして下賤乃
商家なりしか幼少より手跡を出精しこゝ年来
る廣沢文山か筆意を追ひ古法帖に心をよせて終
に能書の誉をとりしか罪ありて京都に遁ひて親鸞上
人大師号の事に携りて　勅勘の罪人に成りしか
末年免許ありし其烏石生涯筆を好む人有りしか
鸞石にて麻布古川町に久敷居りし石を調へて己
か名を記せるもの烏鈴か森へ同志の事を好む人と
示し合せて建碑なしけるもの人かくなる石といふなり

をもりて寶石といふ事を云しに古寶石ハ山崎与
次といへる町人の裏店に在し石の由也

町家にも利を求るこまよ賢き事

古寫石上京せんと思ひ附日本橋須原屋にて金百
両を借てかるに元来放蕩不羈の者なれバ古金
子をかへすあてもなかりしが流石に面目なかりける
が須原屋へ指て来らざりしを須原やさるものなれバ
寫石が行衛を尋て吹聴せんといひしに古の金に乃
事いひくらしかりけるを聊の金子に古友をこりて
盈きやと世評に詮して暫く占ひ重しまま両同

人の古記を次刊板なし蔵板となし家の利徳
をはかしとなり

古への武道家の事

水野左近将監の家臣祖父とやらん云く武道の
人なりしが弟子をもなくきゝるを同志の人夫婦
子の所をさかりきなんとて弟子よおちきものも先へ
来り集りけるかきゝをお主跡より来りて何の道に
常刀を取に手つかり上りて裏家屋へ入しに先生の客ハ
いつも常剣にて太刀を打をとりかゝりけるを
ハきとお主情中より精々持の小簡を出しつく　次

隅にかさを付て中にも例に逢ひけるよし昔ハかゝる出
会ありしとかや也

吉兆前表の事

当時罪なくして諸大夫法と定へる人を以布衣
なりし頃上野へ登りて帰るさに下谷廣小路にて
葬礼にあひしに大風吹て棺を吹きし白無垢
風に飄飛して彼者の東奥の上へ落けるを葬礼乃
輩ハ大きにおそれ一ツにも及ばず其を取あつめて
逃さりぬ彼者の家来大におそろしき事のおと
憶り追うけんとさしかゝる人其を制して大白無

垢を途中に拾ひ候ハんもうちなきものかはれハ我家へ持帰り
けるに家内にその見りきやうに中の吉事なりけるに其
是ハ手に入て我也当年ハ必諸大夫の法役りも
進しなんと神の示にも悦び祝ひけるが果して当年
諸大夫にて法役に進み白無垢を着しにも其里
物ハ吉瑞も多きものにや水谷信濃守といへる人の孫
なりしもよろしや法役登城或ハ当年の附ハ必昇進ける信濃
守法名守居に養し頃も大なる車軸を落し当但馬
守法名寺居にありし頃も家日大なる鳥帽を落しける
まつ家の小屋にて門番人出たりといへる鼻をとる

て黒き亀出しけるを目出度事なりとて池へ放ち
悦ひ給ひけるに其年為来して毎望日法会を修せ
仰付けると也

日本政府圖書
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan